

【論 説】

第二次世界大戦期のスイス外交 ～永世中立国の外交文書が示す戦時下の日本

福 原 直 樹

1. はじめに

1.1 新聞社のジュネーブ特派員として

本稿の主な目的は、スイス外交文書の分析を通じて、中立国・スイスが見た大戦期の日本の状況を明らかにすることである。

筆者¹は毎日新聞社の特派員として1995年4月から2001年3月までをスイス・ジュネーブで過ごし、その間、国連欧州本部や世界保健機関（WHO）、国際オリンピック委員会（IOC）などジュネーブとその近在の国際機関約20の動きを報じる一方で、スイスの政治、経済、社会一般についても報道した。無論のこと、これら国際機関のニュースは日本でも関心が高く、筆者が送った原稿は新聞で大きく扱われたが、問題は後者の方だった。

スイスのような小国のニュースは、それが仮にスイスにとっての「大ニュース」であっても日本で注目されるものは少なく、ジュネーブから送った筆者の原稿の大部分は、翌日の紙面で小さくしか扱われなかったのだ。懸命に取材した記事があまり注目を集めないということは、新聞社の特派員として自分の担当国が「格下」に見られているような気がして、非常に落胆したことを覚えている。日本人なら誰でも知っている「永世中立国」²にもかかわらず、日本社会にとってのスイスの政治、経済、社会などのニュース性³は、米や中国、朝鮮半島のそれより、はるかに低いことに改めて気づかされたのである。

そんな中、何とかスイスのニュースを新聞の前面に押し出そうと筆者が考えたのは、その「永世中立国」の歴史を、日本人の視点でたどることだった。筆

者の所属していた毎日新聞など日本の新聞は、毎夏の終戦記念日前後、第二次大戦を巡る日本の様々な動きや状況について検証する記事を書くことを求められる。このことを考え筆者が注目したのは、大戦中の日本に関して、永世中立国としてのスイスが果たした役割だった。大戦中、スイスは、東京に公使館を置き、様々な外交活動を展開していたほか、日本のポツダム宣言受託では、連合国と日本との仲介役として重要な役割を果たしている。これらの一部は過去にも報じられているが、大戦中の中立国としてのユニークな活動をさらに調べていけば、スイスと日本に関する新たな、そして詳細な歴史的事実が判明するかもしれないと考えたのだ。そしてこれらの事実があまり知られておらず、ニュース性があるならば、日刊紙の記事として報道する価値があるのではないかと考えたのである。

本章では、まず、このような考えから筆者がジュネーブ特派員時代以降、見出したスイスの外交文書を紹介したうえで、本稿の目的を再度、確認したい。

1.2 スイス外交文書 (Documents Diplomatiques Suisses⁴)

幸いなことにスイスは歴史学会 (Société Générale Suisse d'Histoire) が中心となって1979年「スイス外交文書刊行委員会」(Commission Nationale pour La Publication de Documents Diplomatiques Suisses) を創設し、筆者がジュネーブ特派員であった当時、1848年以降のスイス外交に関する公文書の発刊を続けていた。スイス政府の公文書が作成後30年で公開されることを受けたものだが、同委員会は当時、スイス連邦公文書館や、スイス外務省、スイス科学調査基金などで構成されており (Fleury et al. vol.16 1997: VII)、外交文書発刊は国家的なプロジェクトと考えてもいいだろう。そして筆者がジュネーブ特派員として赴任していた2001年までに同委員会は、1848年から1952年までの外交文書を18巻 (Fleury et al. vol.18 2001) まで発刊しており、その中には大戦中の日本に関係する文書も多く含まれていた。スイス外交文書はその後も発刊され続けており、現時点では1999年までの27巻が発刊されている⁵。次ページの写真①は筆者が所有する各巻である。本稿ではこれら紙媒体で発行された文書を同委員会

の呼称（Fleury et al. vol.16 1997 : XXIV）に従い DDSと略し、文中の引用においては、編者、発行年が同じながら、通し巻番号が違うものがあるため、(DDS、通し巻番号（vol.）：ページ番号)の形で記載する。



写真①：スイス外交文書の各巻

スイス外交文書刊行委員会は、非常に多くの文書の中から、どのような基準に基づき刊行する文書を選んだのだろうか。スイス外交文書第18巻の冒頭で、同委員会はその基準を以下のように説明している。

「外交文書の選択にあたっては、スイスにとっての外交的利害の記録の集積や、外交政策の変遷に関する記録の集積を目的としなかった。むしろ、多様な局面におけるスイス外交政治の本質的な傾向を示すものや、国際関係上、根幹をなす事実や概念に注目した。文書の発刊では……重要な出来事に関する中立的な視点を反映した分析や報告、オリジナルな情報を含む分析や報告（など）を集めた」（DDS, vol.18 : VIII）。

筆者は毎日新聞のジュネーブ特派員時代、この文書選択に携わったダニエル・ブルジョワ氏（当時、スイス連邦公文書館研究員）に取材したことがある。同氏は大戦中のスイスとナチス・ドイツの関係が専門だが、インタビューの中で同氏は「歴史家として20年間、多数の文書を研究する中で発見したオリジナルな文書を選んだ」と発言している⁶。発刊文書の選定はまさに「中立的な視点」から発掘した「オリジナルな情報を含む分析や、報告」が基準だったのであり、その場合そこにはニュース性が高いものが数多く含まれると考えるのは、筆者だけではないであろう。

DDSでは各巻の巻頭で、各国ごとの文書の概要をまとめている。これを参照しながら、大戦中とその前後の期間について、各巻の全文書数と、このうちの日本に関する主な文書数を見てみよう。

1) 第13巻（1939年1月1日～1940年12月31日／全429文書、1097頁）：「日本がスイスの工業界から機械を購入する件についてのスイス中央銀行の報告」

1 文書 (DDS, vol. 13 : LXXII)。

2) 第14巻 (1941年1月1日～1943年9月8日／全418文書、1400頁) : 「日本の対米宣戦布告と在日スイス人の状況に関する在東京公使からの電報」「米軍による初の東京空襲」「外相を兼務した東条英機首相との会談」「日本占領地域での日本軍の横暴なふるまいについて」「開戦以来の日本の政治、経済、社会状況の総合分析に関する長文の報告」「日本占領地域のスイス人同胞との連絡の困難さ」など11文書 (DDS, vol.14 : LXXIX- LXXX)。

3) 第15巻 (1943年9月8日～1945年5月8日／全447文書・1200頁) : 「日本の状況についての在東京公使からの報告」「在東京スイス公使館の活動が困難になっていることに関するスイス政府の抗議」など5文書 (DDS, vol.15 : LVII)。

4) 第16巻 (1945年5月9日～1947年5月31日／全124文書・428頁) : 「日本の広島、長崎原爆投下への反応などに関する在東京公使の報告」「降伏前の日本と連合国の交渉へのスイス外交の介入状況」「マッカーサー将軍との会談に関する在東京公使の報告」「大戦中の日本でスイスが行った米利権の保護活動に関するマッカーサー将軍からの謝意」「赤十字国際委員会の財政悪化に関するスイス政府の援助の必要性和日独からの支払い」など8文書 (DDS, vol.16 : VII)。

5) 第17巻 (1947年6月1日～1949年4月30日／全134文書・493頁) : 「スイスにおける日本資産の連合国 (旧ソ連を含む) への引き渡し」など2文書 (DDS, vol.17 : XLII)。

6) 第18巻 (1949年7月1日～1952年4月30日／全145文書・486頁) : 「ダグラス・マッカーサーとの会談」など3文書 (DDS, vol.18 : XLIX)。

これら文書には3点の特徴がある。

第一は、大戦期とその直前直後を扱った第13巻～16巻にある日本関係文書25のうち、当時の在東京スイス公使だったCamille Gorgé氏 (写真②)⁷の報告が14と半数以上



写真② : Gorgé 公使

を占めていることである。後述するが、Gorgé公使は大戦直前に日本に着任、昭和天皇・皇后に拝謁後、大戦中を日本で過ごし、終戦4か月後の1945年12月に日本を離れた人物で、帰国直前にはマッカーサー連合軍最高司令官との会談も行っている。

第二は、上述のように「国際関係上、根幹をなす事実や概念に注目し」て「中立な視点を反映し、オリジナルな情報を含む分析や報告」として選ばれたこれらの文書は、歴史性があり、興味深い内容のものが多数みられることだ。

文書を概観すると、公使の東京からの報告では例えば、広島・長崎への原爆投下直後の日本社会の状況や日本政府の動きなどが具体的に描かれている（例えばDDS, vol.16 : 78-79）ほか、公使のマッカーサーとの会談を報告した文書では、マッカーサーの詳細な発言内容（DDS, vol.16 : 100-101）も含まれている。筆者はジュネーブ特派員当時、これら文書の多くを専門家に見てもらったが、予想通りこれら文書には当時、あまり知られない、歴史的に貴重な情報が多く含まれていることがわかった。歴史性があるうえ、一般にあまり知られていないということは、取りも直さずニュース性が高いということであり、事実、筆者がジュネーブ在任中、上述の専門家の談話とともに東京に送ったこれら文書に関する記事は、いずれも新聞で大きく扱われた（例えば毎日新聞 1997 a）。

最後に、これらの文書には「永世中立国」としてのユニークな活動が示されているということだ。例えば文書ではスイス政府が1945年8月15日の日本の無条件降伏受託で、中立国としてどのような役割を果たしたのかが具体的に示されている（DDS, vol.16 : 81-83）し、大戦中に各国から委託され、Gorgé公使が行った日本国内の捕虜・抑留者収容所への訪問の状況なども克明に記されている。ちなみに、これら収容所の訪問では、公使が何度も求めたにもかかわらず、日本政府が認めないため実施できなかったものもあった（例えばDDS, vol.16 : 105）。

1.3 その後のスイス外交文書—ネットでの公開

以上は、筆者がジュネーブ特派員時代に引用した紙媒体としてのスイス外

交文書の概要だが、同文書の刊行は1997年に大きな転機を迎えることになる。同年5月以降、文書がネットで公開されるようになり、閲覧可能な公文書数が大幅に増加したのである⁸。このネットの運営主体名は「スイス外交文書」（仏語：Documents Diplomatiques Suisses／独語：Diplomatische Dokumente der Schweiz）の別な省略形である「Dodis」⁹であり、Dodisはベルンのスイス人文・社会科学学会（l'Académie suisse des sciences humaines et sociales）の研究所としての位置づけとなっている。DodisはDDSの刊行を行っていた「スイス外交文書刊行委員会」同様、スイス歴史学会やスイス連邦公文書館、スイス外務省の支持、援助を受けており¹⁰、DDS同様、国家的プロジェクトと考えてよい。ちなみにDodisが公開したこれら文書は「dodis.ch/引用番号」の形で分類されており、本稿での引用は、Dodis側の要望¹¹に沿って、この引用番号を使用するほか、巻末の参考文献一覧ではネットのアドレスも記載する。

筆者は毎日新聞のジュネーブ支局を2001年に離任後、2003年4月に同社のブリュッセル支局に赴任し、欧州連合（EU）を中心とした欧州の動静を見たほか、2009年4月には同社パリ支局に赴任、仏、スペイン、ポルトガルなどの政治、経済、社会を取材した。この間、スイスについては任地が近いこともあり、その動向を取材し続ける一方で、折に触れてDodisで公開された文書の閲覧を行った。またパリから帰国後の2012年以降、大学に職を得てからは本格的にDodisのスイス外交文書を調べている。

2024年8月15日時点で、例えばJapan/Japon（英独語／仏語での「日本」）、Tokio/Tokyo（独語／仏語での「東京」）、Gorgé（当時の駐日公使）をキーワードに1940年～1945年を検索すると、上述の紙媒体である「スイス外交文書」で刊行されなかった、数多くの公文書が公開されていることがわかる。以下はそれぞれのキーワードで検索した結果、公開がわかった主な公文書の概要と、全公文書の概数である。

1) Japan/Japon: 「松岡新外相との会談」（1940年7月26日、Gorgé公使、dodis.ch/51393）「松岡新外相の外交政策」（1940年9月26日、在東京スイス公使館、dodis.ch/51398）「米国政府による日本における米資産の保護－米政府への回答」

(1941年12月8日、スイス政府、dodis.ch/51399)「スイス政府政治省による大戦後の政治、経済、軍事、運輸などの世界秩序に関する初考察」(1943年1月8日、スイス政府、dodis.ch/52267)「極東でのスイス代表による米利権の保護活動に関する米政府の謝意」(1943年2月18日、スイス政府、dodis.ch/51402)「浦和(抑留者)収容所への訪問」(1945年6月25日、在東京公使館、dodis.ch/2032)など約80件。

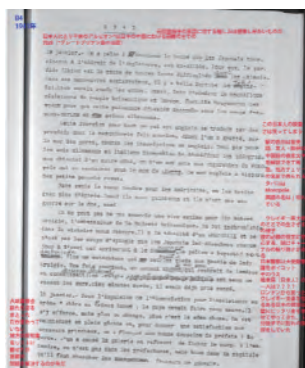
2) Tokio /Tokyo:「1944年公使館活動報告」(1945年1月30日、在東京スイス公使館、dodis.ch/51411)「5月25日の東京空襲に関する報告」(1945年6月2日、Gorgé公使、dodis.ch/51404)「捕虜収容所を空爆から守るための問題点」(1945年6月19日、Gorgé公使、dodis.ch/1981)など約40件。

3) Gorgé:「第二次大戦下の日本でのGorgé公使日誌」(1940年1月7日～1945年、Gorgé公使、dodis.ch/50633)「昭和天皇への信任状捧呈式について」(1940年3月5日、Gorgé公使、dodis.ch/51390)「日本で拘留されたスイス市民一人の釈放について」(1940年7月26日、Gorgé公使、dodis.ch/2011)「(敗戦後の)日本の状況」(1940年9月10日、Gorgé公使、dodis.ch/2015)など約40件。

1) - 3)の間で重複する文書はあるものの、また、検索の関係上、ごく少数ではあるが日本とは本質的には無関係な文書が含まれているものの、ネットを通じて閲覧できる公文書数は、紙媒体であるDDSが公開した公文書より大幅に増えている。これらDodisの文書を見ると、DDSをさらに充実させる形で、大戦中とその前後のスイスの対日外交や、日本の状況が示されていることがわかる。

1.4 大戦下の日本におけるGorgé公使の日誌

これらDodis文書の中で、戦時下の日本の動静を報告した文書として大きなニュース性を持つものは、公使が日本での在任期間に残した「第二次大戦下の日本での日誌」(写真③、dodis.ch/50633)だろう。上述のように、公使は1940年来日し、大戦期を日本で過ごしたうえで、1945年12月に離日した人物である。



写真③：Gorgé 公使の日記の一部と筆者の意識用メモ

1893年9月、スイス北部バーセルに近い小さな町、Bassecourt（ジュラ州）に生まれたGorgé氏は、1917年5月、当時のスイス連邦政府経済・文部・研究省に入省。翌年、当時の外務省に転じた。その後、氏は日本との劇的な邂逅を果たすことになる。1924年から1926年までの間、日本政府（外務省）に法律顧問として招かれたのである¹²。この経験が公使にとって非常に貴重なものだったのは明らかで、日誌にはたびたび当時の経験や、その時以来培ったとみられる日本文化への理解が綴られている。その後、氏は

1932年から1939年まで国際連盟スイス代表团随員として勤めた後、1940年、公使として日本に赴任した。1945年の日本離任後は、1950年9月から1953年5月まで在モスクワ（旧ソ連）公使、翌1954年11月から1958年10月まで在コペンハーゲン（デンマーク）公使、大使を務め、1978年にスイスの中部の美しい町、ルツェルンで約85年の生涯を閉じている¹³。

Gorgé公使の日誌を概観しよう。「ある目撃者の日誌」（Journal d'un témoin）という表題と、「日の出ずる国の瓦解」（Débâcle au soleil-levant）という副題がつけられた伝説の日誌は508頁に上り、390頁の克明な日記の部分と、終戦後、帰任するまでを描いた報告の部分、118頁で構成されている。うち日記は公使が日本に赴任するための米国経由の旅が始まる1940年1月7日から、1945年10月2日に終わっている。一方、報告の部分は日記形式ではないため細かな日付が分からないものの、1945年9月上旬ごろから始まり、途中、英国軍艦で12月に離日するところを挟み、ロンドンに1946年1月に到着、さらに旅客機でスイス（チューリヒとみられる）に帰国するところで終わっている（dodis.ch/50633）。ちなみに本稿で日誌を引用する際は、日誌に関するDodisの引用番号dodis.ch/50633に加え、公使の記した日付を記載する。日誌自体が大部であることに加え、公使の記した通し頁番号が一部不明なためである。

筆者は2020年から約3年間をかけ、この日誌全約500頁を意識した¹⁴。その結果、見られた特徴は以下の3点である。

第一に、日誌が単なる公使の身辺雑記にとどまらず、上述のDDSやDodisのスイス外交文書での公使の公的報告（公電）とかなりの部分、シンクロナイズしているうえ、公電を補う情報にあふれているということだ。例えば、上述の「昭和天皇への信任状捧呈式」については、公電が捧呈式場の図付きで式の様子を簡潔、客観的に述べる一方で、日誌では公使が、いかに天皇の前で緊張したかや、そこで出会った皇后がいかに魅力的だったかなどが描かれている（dodis.ch/50633, le 5 Mars 1940）。

第二は、当然ながら日誌には公式の報告書には見られない、仕事を含めた公使の日常が事細かに記載されていることだ。例えば日誌では公使と親交のあった在東京の各国外交団の表情が詳細に描かれており、その中には緒戦の勝利に酔いしれる独など枢軸国の大使館の様子（dodis.ch/50633, le 4 Août 1940）や、開戦以降一時期、軟禁されていた米国大使の様子（dodis.ch/50633, le 15 Décembre 1941）などもある。また、東京で大規模な空襲に遭遇した際の公使や公使館の様子も記されている（dodis.ch/50633, le 18 Février 1945）。

第三としては、公使が見た日本社会の様子が数多く登場することだ。例えば日誌には、空襲に備えての東京でのバケツリレーの練習風景が描かれ、それを見た公使が、市民はやる気なく練習に参加しており、万が一の時は何もできないような雰囲気だ、と観察した場面がある（dodis.ch/50633, le 17 Janvier 1944）。また戦意に燃えるはずの国民が大戦中、東京の荒川での釣りに興じ、渋谷、新宿の映画館前で行列を作るのを見、公使が、「政府は見えるもの（国民の心情）を見ていない」とした記述も残されている（dodis.ch/50633, le 26 Juillet 1944）。

幕末期から明治維新にかけて日本に滞在した英の外交官、アーネスト・サトウが記した見聞録（サトウ2010）は、現在の我々の考え方に近い西洋民主主義の視点で当時の日本社会が描かれており、非常に意義深い。Gorgé公使の日誌も、やはり当時のスイスという西側民主主義国家の視点にどう軍国主義下の日本が映ったかが分かり、非常に興味深いものになっている。

1.5 本稿の目指すもの

本章の冒頭でも述べたように、第2章ではこれら DDS、Dodis の文書をもとに、第二次大戦とその前後に関する永世中立国スイスの外交活動や、スイスが見た同時期の日本について分析する。その際使う DDS や Dodis の文書は可能な限りニュース性のあるものを選ぶが、ちなみに筆者は本稿で使う DDS 文書の一部を過去、報じたことがある一方で、今回使う Dodis の文書については一度も報じたことがない。また第3章では、第2章を踏まえたうえで、スイス外交文書の持つ意義を再度、確認したい。

2. 1940年～1945年

2.1 1940年

2.1.1 昭和天皇と信任状捧呈式

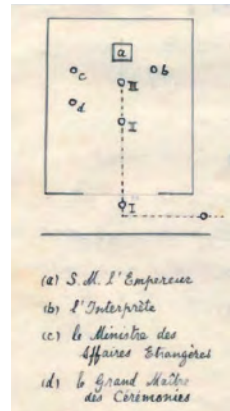
1940年2月14日に横浜に到着して以来、Gorgé 公使の最初の大きな「仕事」は昭和天皇に対する信任状の捧呈であった。公使自身、1940年2月22日の日誌で述べるように、捧呈式を待つ間は「公使として信任されない限り、何も（外交活動が）できなく、「非常に困った」期間であり、日誌には「宮内省からの召喚を待ち続ける」「（捧呈式までは公使として）誰も訪問できないし、誰をも招くこともできない。まるで外交団の控えの間にいるようだ」と記されている（[dodis.ch/50633](#), le 22 Février 1940）。結局、信任状捧呈式は3月5日に決まったが、それに備え公使は米国のジョセフ・グルー駐日大使に捧呈式の内容を聞き（[dodis.ch/50633](#), le 21 Février 1940）、直前には宮内省の侍従の訪問を受け、式での天皇を前にした歩み方の指導を受けている（[dodis.ch/50633](#), le 3 Mars 1940）。

捧呈式については、同日付の公使の本国への公電（[dodis.ch/51389](#)）のほか、公電に付随する「捧呈式のプログラム」（[dodis.ch/51388](#)）、「天皇の言葉」（[dodis.ch/51391](#)）の文書、式での公使の発言に関する文書（[dodis.ch/51390](#)）に詳しい。これら4文書では式での天皇、皇后などの立ち位置や、式場で公使が天皇に一礼する複数の場所などが細かく図で示される一方、天皇の言葉なども残されて

いる。以下、これら4文書と、Gorgé公使の日誌で当日の式の様子を再現しよう。

式当日はまず、午前10時5分、帝国ホテルで待つ公使夫妻を儀典官 (le Maître des Cérémonies) が迎えに出向き、同15分、公使は宮内省の菊の御紋の車で、また夫人はスイス公使館の車でホテルを出発した。ドレスコードはフロックコートまたはモーニングである。皇居には「儀仗用の門」(la porte d'honneur) から入り、近衛連隊 (la garde impériale) の儀仗 (les honneurs militaires) を受けた後、10時20分に入った。その後、公使夫妻は儀典官に導かれ、有田八郎外相と儀典長が待つ控えの間にいった。

10時30分、公使は、儀典官に導かれて昭和天皇の待つ謁見の間 (la salle d'audience) に入るが、ここで公使はまず入り口の敷居の前で一礼し、さらに部屋の中央で一礼、最後に天皇の10歩前に歩み出て、また一礼した。添付の図①は上述の公電「捧呈式のプログラム」に記されていた手書きのもので、図の中の○は公使で、aは天皇、bは通訳、cは有田外相、dは儀典長である。また、点線は公使の歩み、I、II、IIIは公使が礼を行った場所である (dodis.ch/51388:1)。日誌によると、天皇は大元帥の軍服姿で、手は常に「体にくっついた」形、即ち気をつけの姿勢で、「メガネの奥の目には表情がなかった」という (dodis.ch/50633, le 5 Mars 1940)。



図①

この直後、公使は天皇に概略、まず以下のような上奏文を読み上げた。天皇に向かって右側に控える通訳が内容を翻訳する (dodis.ch/51388)。

「陛下、ここにスイス連邦大統領による小官の信任状と前任者の召喚状を捧呈致します。僭越ながら、私に託された任務は陛下と陛下の政府のご厚意あふれるご支援があつてこそ、恙なく執り行えるものであります」「我々2国間の関係は常に非常に心のこもったものでした。スイス人は日本人の美德を愛し、日本人はこの小さな共和国(スイス)に対し、好意あふれる関心を持ってくれています。特に日本ではスイスが發祥の地である赤十字国際委員会が非常な尊

敬を集めています」

公使は自身が1924年から1926年までの間、日本政府に法律顧問として招かれた経験を前提に、概略、以下のように続ける。

「我々二国間関係の発展のために尽力できる類まれなる特権が与えられたことに加え、私が以前、心の底から賞賛した国で、再び働ける歓びに浸っております」「最後に、陛下のご信頼にお答えするためにも、また建国2600年を迎えた大（日本）帝国とスイス連邦の間にある長い友好関係強化のためにも最善を尽くすことを誓います」（dodis.ch/51390）

この間、公使はかなり緊張していたようだ。日誌によると、上奉文の読み上げでは「額に汗するような」感覚になり、用意した文章は短いにもかかわらず、それは「際限なく」続くような気がし、途中で一部を省略したいとすら考えた。また謁見の間の雰囲気は「ハエが一匹、絨毯に落ちてでも気づくような静けさだった」とも述べている（dodis.ch/50633, le 5 Mars 1940）。

この後、信任状を天皇に渡すと天皇は概略、以下の内容を読み上げた。

「非常な歓びとともにスイス連邦による公使の信任状を受け取った」「（公使と）同様に、我々2国間の友好関係がより一層強化され、発展することを切に望む。この崇高な目的のために公使が最大限の努力をささげることを嬉しく思う」「以前この国に住み、人々の心をよく知った公使が、その任務遂行を全うすることを一つたりとも疑っていない」（dodis.ch/51391）

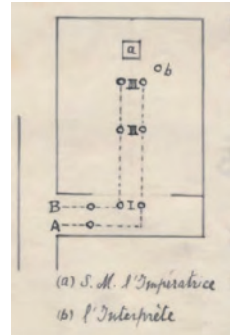
公電によるとこの後、天皇はGorgé公使と握手し、有田外相と少々言葉を交わすと、再び公使と握手、自ら謁見の終了を告げた。そして最後に公使は後ずさりしながら、入室した時と同じ場所で3度礼を行った後、退室している（dodis.ch/51388 : 2）。

日誌によるとこの間、少々、天皇との会話があった。そこで天皇は公使が国際連盟のスイス代表部で働いた経歴に触れ、当時、日本の中国侵略に対する批判一辺倒だった国際社会中で、公使が中立的な立場から発言していたことに、礼を述べた。公使は天皇の予期しない言葉に「心を打たれた」と記述している。退室後、緊張が解けた公使は「小鳥」のように身軽になった気がした。公使に

としてはまさしく「重要な日」だった (dodis.ch/50633, le 5 Mars 1940)。

2.1.2 皇后との謁見

捧呈式の後、公使は控えの間で待っていた夫人と、別室で皇后の謁見を受けた。天皇の謁見とは逆に今度は、部屋の入口向かって左側から入り、天皇の時と同様、皇后の前に出るまで同じような位置で3度礼を行った。図②はやはり「捧呈式のプログラム」に記載されていたもので、図中のA, Bは公使夫妻、aは皇后、bは日仏通訳の女性であり、I、II、IIIは公使夫妻が礼を行った位置である。皇后の前に出ると公使夫人は片足を後ろに引き、膝を折ってお辞儀をし、これに対し皇后は2人に手を差し出した。この後、皇后は2人と言葉を交わした後、天皇同様、自ら謁見の終了を告げ、公使夫妻はやはり後ずさりしながら3度の礼を行い、退室している (dodis.ch/51388)。



図②

皇后との謁見状況は、公電よりも公使の日記に詳しい。皇后の前での長いお辞儀のあと、そこで公使が見たのは「この世で最も魅力的な微笑み」(le plus gracieux des sourires)である、皇后のそれだった。皇后は、手のしぐさで2人に座るように求めたが、この場面を公使は「日本は儀礼作法に厳格な国である一方、微笑みの国であるとも知った」と書いている。皇后との会話の主題は事前に決められていなかったが、ここで皇后は「(日本での) 最も美しい桜はどこのものだとお考えでしょう」と、「ほんの少しいたずらな」(un tantinet malicieux) 口調で公使に聞いた。公使が自分の住む麹町の桜を賞賛すると、皇后は同意するようにうなずき、微笑んだという (dodis.ch/50633, le 5 Mars 1940)。

2.1.3 松岡洋右外相

大戦直前のこの時期、Gorgé公使の活動でニュース性を持つものは、公使の

松岡洋右外相との会談と、公使による松岡外交の分析だろう。

松岡は1880年に山口県に生まれた。米オレゴン大学に学んだ後、外務省入りし、1930年、衆議院議員となった。1933年には全権大使として日本軍の満州撤退勧告案を審議するジュネーブの国際連盟会議に派遣される。会議で同案が採択された時、松岡は日本政府の訓令通り連盟脱退を宣言して退場し、当時の世論から「ジュネーブの英雄」ともてはやされた。その後、松岡は1940年、第二次近衛内閣で外相となり、対米強硬路線を唱える一方で、同年9月の日独伊三国同盟締結、翌1941年4月の日ソ中立条約締結で中心的役割を果たした。戦後はA級戦犯として東京裁判で服役中、1946年に病没している（ブリタニカ 松岡洋右）。

戦争指導者として枢要な役割を果たした松岡は、「自負心と自尊心が強く」（上山、三宅1990：327）、「自分の頭の鋭さに絶大な自信を持っていた」（上山、三宅1990：330）と評される人物である。歴史学者、林茂は松岡について「頭の回転も速かったが、口の回転がそれ以上に早く……とうとうと弁じ」る一方で、その内容は「論理の飛躍が多く、現実性に乏しい」とも描いている（林1997：187）。

そのような松岡とGorgé公使が会談したのは、1940年7月26日、松岡の公邸であった（dodis.ch/51393：3-5）。当時、17日に近衛文麿に組閣の大命が下されており、22日に発足した第二次近衛内閣に松岡は新外相として入閣したばかりだった（藤原1994：308-309）。

26日付のGorgé公使の本国への公電（全5頁）では、まず松岡を「新内閣にあって疑いもなく強烈な個性を持っているとの印象を与える、威圧的な性格の人物であり、辛辣な雄弁家」だと紹介している。公電によると松岡は自身の今後の外交政策について「近衛新内閣の方針はまだ天皇の裁可を経ておらず、（今は）議論できない」と話していたが、公使は公電で「これまでのプレス（新聞）への発言から、彼（松岡）が日本の外政に与える新たな方向性については誤解のしようがなく」、「ニッポンの拡張主義は新たな推進力を得た」と報告、松岡によって日本の対外侵略の政策が、ますます強化されていくと分析している

(dodis.ch/51393 : 3-5)。

一方、松岡就任後の日本外交がどう「変貌」するかについて、公使はまず、「米英に気を遣っていた前任者ら（の態度）から自由になり、新外相はローマ＝ベルリン枢軸に近づく道を探るだろう」と分析する（dodis.ch/51393 : 4）。事実、松岡は就任直後から3国同盟を推進し、それまで米軍との関係悪化を懸念して同盟締結に消極的だった海軍を抑え、同年9月には3国同盟の締結を成功させている（藤原 1994 : 315-317）。公使は、この時点ですでに近い将来の松岡の動きを読んでいたといえよう。また今後の日本の対ソ外交について公使は、日本が別のところで「フリーハンド」（les bras libres）で活動する必要がある限り、「モスクワとは摩擦をなくするか、可能な限りそれを最小限にとどめる」だろう、とも指摘している（dodis.ch/51393 : 4）。松岡は翌1941年4月、「南進を進める間、北方の安全をはかる」ために電撃的にモスクワで日ソ中立条約を結んでおり（藤原 1994 : 366-368）、ここにも公使の世界情勢を読む慧眼が見える。

ちなみに、公電によると松岡のジュネーブでの国際連盟脱退の際の演説を、公使は当時、現場で国際連盟スイス代表団随員として聞いており、松岡との会談で公使はそのことに触れている。これに対し松岡は、いかに自分がスイスの美しさを賛美しているか、そして特にジュネーブにあるレマン湖や、霊峰・ユングフラウを頂くバルナーオーバーラントの美しさが忘れられないかを語った。松岡はいつか仕事が終わったら、これら魅力的なスイスの地を再訪し、休養するのが夢だと付け加えた（dodis.ch/51393 : 5）。

この公使の松岡訪問は、同日付の公使の日誌でも概要、以下のように触れている。

松岡の公邸は当時、東京・霞が関にあり、各国外交団の長が公邸1階に集められ、お茶を飲みながら待っていると、外交上の席次（l'ordre de préséance）順に2階の松岡の執務室に一人ずつ招かれ、会談が行われた。松岡は坊主頭、白い服（背広）姿で、手に扇子を持ち公使を迎えた。松岡は紳士的で感情を表にすることなく、前述のように今後の外交政策など、政治一般の話題に触れることを拒否し、最初の訪問は極めて外交的な儀礼に終わった。

ただ公使は松岡にあまりいい感情を持たなかったようで、日誌では松岡について、その眼は「金縁メガネによって和らげられてはいるものの、柔らかな物腰とは釣り合わない邪悪な光を放っていた」と記し、「何だかまどろんでいる猫の類が突然噛みつきそうな感じだった」とも書いている (dodis.ch/50633, le 26 Juillet 1940)。ちなみに当時の国際協調主義者であり、独との同盟に否定的だった元勲、西園寺公望は、松岡を「気でも狂えばかえって今度はまともになるかもしれん」と評していた (上山、三宅 1990 : 322)。

一方、日本の対外情勢で1940年の焦点の一つは、日本の仏領インドシナ (仏印：現ベトナム) 侵略だった。欧州での独の緒戦の勝利、特に6月17日の仏降伏の報を受け、7月17日、陸海軍は仏印を含む南方への武力行使の方針を決め、同月発足した第二次近衛内閣もこの方針を認めた。そしてこれに従い、松岡はアンリ駐日仏大使と交渉し、仏側の現地での主権を尊重するかわりとして、日本軍駐屯を認めさせた。日本軍は9月下旬に現地に進出した (藤原 1994 : 296-314)。

この情勢について公使は9月26日、本国に公電を送り、「名目上の主権が仏に認められても、今後、サイゴンからハノイまでを支配するのは日本である」と分析している。この公電で公使は、現地で仏側と交渉にあたった西原一策陸軍少将 (当時) の部下が日本の新聞で、「仏側は日本を警戒しており……このままでは、我々は (インドシナ) 半島にある大量の資源開発ができない」と主張したことに注目した (dodis.ch/51394 : 4-5)。当時、近衛内閣は独が喧伝した「欧州新秩序」に呼応する形で、「大東亜新秩序」の建設を国策の基本方針としていたが (藤原 1994 : 303, 310)、公使は新聞のこの文章を、日本がインドシナを地理的にも、人種的にも、この大東亜新秩序に含めていることに「強く反響した」ものだ、と指摘した。また公使は「仏は遅かれ早かれ、植民地 (である仏印) を放棄しなければならないだろう」と指摘し、独の立場については、仏印が日本の利権の草刈り場となることを認めるだろうと分析している (dodis.ch/51394 : 5)。公使が公電を送った翌日の9月27日、ベルリンで日独伊3国の軍事同盟が調印されている (藤原 1994 : 317)。公電はまさに時流を読んだもの

だった。

2.2 1941年

2.2.1 豊田貞次郎外相との会談

ドイツのヒトラーは1941年6月22日、独ソ不可侵条約を破ってソ連攻撃を開始した（藤原 1994 : 370）。この報に、3国同盟を堅持する考えの松岡外相はすぐさま参内、独と共にソ連に攻め込むべきだ、と主張するが、これは近衛首相の考えを全く無視した行動だった。一方で当時、対米戦争を避けようとする近衛や一部軍部に対し、松岡は進行中の日米交渉に反対する姿勢を取り続けた。政府内に松岡更迭の気運が高まったのは当然で、第二次近衛内閣は7月16日に総辞職し、同18日、松岡の替わりに外相に豊田貞次郎海軍大将を据え、第3次近衛内閣が発足した。豊田は英国オックスフォード大学に留学経験があり、英国駐在武官も務めた英米通で、日米交渉を考えての任命だったのは間違いない（藤原 1994 : 375-381）。豊田は、日米衝突は極力避けるべきだとの主張の持ち主だった（林 1997 : 224）。

公使が豊田新外相と会談したのは、新内閣発足1週間後の7月25日だった。翌日の1941年7月26日付け公電によると、公使は初対面の豊田に「このように感じと愛想がよく、慎み深い人物は他にいない」と非常に好感を持った。前外相の松岡に抱いた感情とは真逆だった。ちなみに松岡も豊田については公使に「最も敬服する人物の1人」と評価していた。

会談で、豊田は流ちょうな英語を使いながら、まず公使がかつて日本に滞在していたことに言及し、共通の友人について話した。この後、豊田は1927年に自身が海軍軍縮会議でスイス・ジュネーブに赴いたことに触れ、スイスの現状について尋ねた。これに対し公使は、「今ほどスイスが団結している時はない」と答え、「スイスは（中立国であっても）他の国同様、戦争の災禍を被っている。今も様々な制約があるし、本年中に戦争が終わらなければ、制約はさらに厳しくなる」「だがスイス（人）は愚痴をいいません。我々の国は過去、もっと悪い災厄から逃れてきた」と述べた（DDS, vol.14 : 259-260）。

大戦中、スイスは独の圧力で連合国、特に英国との貿易が制限されたうえ、英国も対抗措置として禁輸政策を取ったため、スイスは食料などの輸入が極端に少なくなっていた。スイスフランで見た場合、1941年の英国からの輸入額は1939年の1割近く、1400万³となった一方、輸出額も同様に2300万³とやはり1割近くに落ち込んでいた（Luck 1985 : 803-805）。公使はこのようなスイスの状況を念頭に話したとみられる。

Gorgé 公使の言葉に相槌を打っていた豊田は、公使が、戦争が3回目の冬を迎えた場合、即ち1942年まで持ち越された場合についてほのめかすと、言葉を遮るように言った。「ああ（hélas）！（そうなると）あらゆる種類の苦難が待っている」というのである。（DDS, vol.14 : 260）。豊田の在任は1941年10月までと短かったが、当時陸軍大臣だった東条英機などと違い、最後まで日米交渉に成立の見込みがあるとして譲らなかった（藤原 1994 : 396-398）。この突然の言葉は和平派、豊田ならではのものだったかもしれない。

会談で公使が極東情勢について聞いた時、豊田は言葉を濁すこともあったが、公使は「日本も（戦禍に悩む欧州と）同じなのだ」「彼の懸念がいかほどのものか十分わかる」と記述している（DDS, vol.14 : 260）。ここでいう「極東情勢」で、公使や豊田の念頭に、泥沼化する日中戦争があったのは間違いない。公使は、豊田が自らの責任の重大性を十分感じており、注目を浴びる中で、当時の「悲劇的な状況」に落ち着いて対処するためにベストを尽くすだろうとも書いた（DDS, vol.14 : 260）。豊田は敗戦直前の鈴木貫太郎内閣では軍需相をつとめ、ポツダム宣言受託の是非を決める1945年8月9日の閣議では、戦争継続が不可能だと主張していた（林 1997 : 463）。

2.2.2 公使の得た内部情報—当時の日本の内政・外交の現状

公使はこの1941年7月26日付け公電で、外務省や政府の高官、さらに議員から得た情報をもとに、当時の日本の政策や状況も分析している。まず、会談を終えて豊田の「親身な歓待ぶり」を非常に嬉しく感じ、「松岡とは全く違う」と記した（DDS, vol.14 : 260）公使だったが、それに引き続く文章で公使は「豊

田も松岡と同じ外交政策をとるのは疑いない」と分析している。その理由として、公使は自分の知る「外務省高官」であり「最高級の情報源」が概略、以下のように匿名で話したことを本国に報告する。

「松岡が去っても後任者は松岡と同じ政策をとるし、結論は同じだ。我々は、政策を変えられない。米英との和睦の道は今やほぼ考えられない。遅すぎる、遅すぎるのだ。2年前ならば和睦も可能だっただろう。今後、米国との関係は完璧に悪化する。理由はインドシナや日本の南洋での外交政策だ」

「では戦争か？」との公使の質問に、この外務省高官は概略こう続けた。

「非常に長い戦争になる可能性がある。戦争が長引いた場合、日本は非常に厳しい状況に巻き込まれる。しかし、他に何ができよう。これまで犠牲を払い続けた道をどうやって引き返すというのだ」(DDS, vol.14 : 260-261)

この「最高級の情報源」の指摘が、ことごとく的中していくのは周知の事実である。

また松岡更迭の理由についてこの「最高級の情報源」は概略、こう語った。

「彼はしゃべりすぎ、個人プレーを楽しみ過ぎた。晚餐の席を想像しよう。食事中、自分の意見だけをしゃべり続ける客に皆、一度は耳を傾けるものの、そのうち興味は薄れ、こそこそと隣の客と別な話をし始める。食事後、客の一部はバーに行き、一部はブリッジに興じるが、このおしゃべりだけは取り残される。これが松岡に起きたことだ」

一方で、Gorgé公使は松岡更迭については別な、やはり非常に信頼すべき情報筋が「(松岡が) 独に接近しすぎたからだ」と発言したことも併記した。公使は最近、日本政府が独ソ戦開始について「このような複雑な状況において、いかなる国に期待することも好ましいことではない」と、独を突き放したような公式見解を述べたことを指摘したうえで、この情報筋の見方にも根拠があると記している (DDS, vol.14 : 261)。

その突飛な言動から、松岡が性格的にも政府幹部に嫌われていたことは間違いない。一方で、独ソ不可侵条約を廃棄した独のやり方に多くの政府幹部は衝撃を受けており、こんな中で、三国同盟堅持を唱え、対ソ開戦を訴える松岡に

彼らは懸念を抱いていた（林 1997 : 221-223）。松岡更迭に関して、公使が公電で記した情報や指摘は正しかったと言える。

対ソ政策については、公使は別な「友人である政府高官」に日ソ中立条約の意義について聞き、これも公電で本国に送っている。この政府高官は「条約の締結は好ましいことだった」として、ソ連の脅威を考えずに南方進出に注力できる意義を強調しているが（DDS, vol.14 : 261）、これは上述の公使の見方と同じだった。

内政に目を転じると、第二次近衛内閣発足後3か月後の1940年10月、近衛が中心となる形で、各政党が解体し大政翼賛会が発足した。独のように強力で一本化した国内政治体制を作る試みだったが（藤原 1994 : 303）、結局、この組織は「強力な一国一党を目指す軍部や親軍的な政党人、国民組織を作り軍部への対抗基盤を持つとする近衛側近、（翼賛会を）精神運動機関にしようとする右翼国体論者」（藤原 1994 : 320）などの集まり、即ち「政党人・市民的インテリ・右翼らの寄り合い世帯」（林 1997 : 163）となってしまった。翼賛会には自由主義者や左翼も含まれていたが、翌1941年4月には閣議決定で機構改革を行い、近衛の側近ら、即ち軍部への対抗を目指したグループが退き、官僚が権限を握ることになる（藤原 1994 : 323）。

烏合の衆ともいえる大政翼賛会に、公使が疑問を抱いたのはもっともだった。公電によるとある日、翼賛会で活動する「非常に著名な議員」が公邸に赴いた際、公使は「他の国とは違い、皇室を中心にまとまる日本に、翼賛会のような組織は必要ないのではないか」と聞いている。これに対しこの議員は概略、以下のように答えた。

「確かに、翼賛会は必要ないかもしれない。しかし翼賛会には別な目的がある。日本には、特に議員の中には、体制を覆すような、場合によっては非合法ですらある活動を行なおうとするものがある。彼らは、大衆の騒擾をもくろんでいる。彼らを黙らせるためには何らかの組織に加入させなければならない。我々は彼らを翼賛会の籠の中に閉じ込めておくのだ」

「著名な議員」は公使に次の様にも述べた。「また平和の時代が来て、多かれ

少なかれ平常を取り戻したら、我々はまた昨年までのそれぞれの党に戻る。政党は死んではない。（平和の時代になったら現在の）強制された冬眠状態から眠りを覚ます」（DDS, vol.14 : 262）。

この議員は、大政翼賛会に当時の左翼までが参加した事実を踏まえ、これらの勢力を抑えるためにも翼賛会が必要だと考えたのかもしれない。公使は公電を「このような解釈がなければ理解できない問題（翼賛会）について、この議員は上手く説明してくれた。記録しておく価値がある」と締めくくっている（DDS, vol.14 : 262）。

2.2.3 開戦まで一東郷茂徳外相との対話と日本の社会状況

日本はナチス・ドイツの傀儡だった仏ヴィシー政府（ペタン国家主席）と交渉し、1941年7月末、サイゴンなど仏印南部に進駐を始め、これに対し米英蘭は同月、対抗手段として自国の日本資産を凍結し、米は8月には日本への全面的な石油禁輸を決めた。日米関係が悪化の一途をたどる中、日本は9月の御前会議で10月上旬までに日米交渉が妥結しない場合、対米開戦することを決めた。そしてその期限となった10月の12日、日米交渉にまだ望みがあるとする近衛、豊田らと、開戦決定を求める東条が対立し、第3次近衛内閣は総辞職した。東条を首班とし、ベルリン、モスクワ大使を経験した外務省出身の東郷茂徳を外相とする内閣が発足したのは18日である（藤原 1994 : 382-384）。

Dodisでは、この前後から開戦までのGorgé公使の公電を見つけることはできない。だが、公使の日誌には当時の日本の政治、社会などの状況が詳しく述べられている。

日誌によると公使が新任の東郷外相に会ったのは10月31日だった。だが、公使は東郷にいい印象を持てなかったようだ。公使は法律顧問として日本に滞在中、外務省の同僚として東郷をよく知っており、会食した思い出もあったが、最初の握手の際、東郷は公使とは初対面の振りをした。そして独語が堪能な東郷に公使が「（お会いできて）嬉しく存じます…」（*Es freut mich...*）と独語で話しかけようとする、東郷はそれを日本語で遮り、自らの日本語を近くにい

た通訳に英語で翻訳させた。「過度に外交儀礼に則った」やりかたで、公使は「私の対話の相手は記憶をなくした（振りをする）ゲームをしている」と皮肉っている。会談はスイスと日本の友好関係の強化などについて、儀礼的な応答が続き、約10分で終わったが、いずれにせよ会談での東郷の態度は、公使にとって実に「信じがたい」ものだった（dodis.ch/50633, le 31 Octobre 1941）。公使の目に東郷は上述の、快活で実直な豊田とは全く違う人物に映ったようだ。

東郷が、公使が過去、日本に滞在したことや、東郷自らが過去、スイスの在ベルン日本公使館の書記官だったことに全く触れなかったことに公使は傷ついたようで、公使はこの後、外務省の昔の友人たちを訪ねている。そこで旧友らに会見の様子を説明すると、彼らは自分らのトップのやり方にひどく立腹し、なかんずくその中の一人は激しい言葉で東郷を批判したという（dodis.ch/50633, le 31 Octobre 1941）。公使の外務省内の人脈の広さを示すエピソードである。

この間、公使は開戦が迫る日本での外国人をめぐる状況も記述している。例えば日誌によると、当時、日本社会では外国人（白人）排斥の動きが強まり、ルーマニア人婦人が日本人に路上で突き飛ばされたほか、イタリア人外交官の夫人は日本人に殴られて目の周りに黒いあざをつけた。また、証拠もなく犯罪人として交番に突き出された外交官もいたほか、日本に住むスイス人が子どもたちに「悪魔」「毛むくじゃら」などと、追いかけられる例もあった（dodis.ch/50633, le 17 Mars 1941）。

当時、日本国民には短波放送受信が禁じられる一方で、外交団にはそれが許可されていたものの、警察が外交官の日本人使用人に、外交官のラジオを壊させるケースが横行した。これを防ごうと、仏のある外交官はラジオを南京錠付きのタンスにしまい込んだという（dodis.ch/50633, le 6 Avril 1941）。また、欧州からの郵便物は独ソ開戦でシベリア経由では届かなくなくなった（dodis.ch/50633, le 29 Juillet 1941）。こんな中、日本を脱出するスイス人は開戦までに40人以上に上り、開戦時に残ったスイス人は大人162人、子ども44人という状況だった（DDS, vol.14 : 398）。

2.2.4 開戦－公使の「読み」の的中

11月26日、ハル米国務長官は和平交渉中の野村吉三郎駐米大使に、いわゆる「ハルノート」を手渡した。日本の主張とは全くかけ離れ、満州事変以来の日本の侵略行為をすべて認めない内容で、日本側はこれを最後通牒と受け取り、12月1日の御前会議で正式に対英米開戦を決定した（藤原 1994 : 410-411）。これらの動きは無論、国民には知らされていなかったが、Gorgé 公使は開戦を読み取っていたようだ。まず4日の日誌に公使は「太平洋に暗雲が広がっている。日本と世界にとって東条（首相）と東郷（外相）の2人組（le tandem Tojo-Togo）は大きな不幸だった」と書いたが、この時点で公使は、「（開戦は）覚悟しているが、すぐにはない」と観測し、理由として2日に米に向け客船「龍田丸」が出航したことを挙げた（dodis.ch/50633, le 4 Décembre 1941）。ちなみに龍田丸は日本側が開戦日を偽装するために出航させたものとされ、開戦で引き返している（郵船OB氷川丸研究会 2008 : 195-197）。

だが、開戦前日の7日の日誌で公使は、外務省を訪問した際、職員らがもはや「状況がほぼ絶望的」であることを隠さず、ある官僚は「米の要求は、満州、インドシナ、中国からの日本の引き上げを迫るもので、我々に月をつかめと言っているようなものだ」と語ったと書いた。公使は日誌で、こう続ける。

「米の（ハル）ノートに対する返答を外務省は準備中だが、ある外交官は非常に深刻な口調で『日米交渉は終わった。これ以上我々は譲れない』と述べた。この口調で私はもはや疑わなかった。開戦はすでに決まっている。賽は投げられた。宣戦布告は単に手続きだけのものだろう。私は胸に重いものを感じながら外務省を辞した」（dodis.ch/50633, le 7 Décembre 1941）

日本時間で8日、ハワイ・真珠湾が攻撃され、同日、公使は概略次の公電を送った。

「外務省筋は、米が譲歩しないため日本は政治、経済的に手詰まりで、この状況を脱するために捨て鉢の行動に出る、と私に打ち明けていた。外交官らは対話継続を考えたが、軍部は解決を急いだ。天皇が宣戦布告し、戦争が雷のように日本国民を襲った。外国人排斥が危惧される中（日本国民の）規律ある行

動を望む」(DDS, vol.14 : 398)

同日、スイスの首都・ベルンでは米公使館がスイス政府に「中立国として日本での米国（人の）利権保護を行う意向がある場合、早急に東京のスイス公使に指示を行ってほしい」と求めていた（dodis.ch/51397）。この際、米公使館はスイス側に「多くの米国人が日本を離れており、保護すべき米国の財産はあまり多くない」と説明したという（dodis.ch/51398）。これに対しスイス政府は即日、米の利権代表を「喜んで」務めることと、すでに東京のスイス公使館に指示を出した旨を、ベルンの米国公使館に伝えている（dodis.ch/51399）。

大戦中、公使は米英を含め、連合国など21か国の日本国内での利権を保護する（DDS, vol.16 : 105）ため奔走することになるのだが、これがその始まりだった。

2.2.5 開戦直後—米大使館の様子

米利権保護を本国に指示されたGorgé公使は、日本政府の許可を得たうえで、開戦約1週間後の15日、米大使館を訪問した。日誌によると当日、入り口で監視する日本の警察官が入館を拒否したため、外務省に抗議し、やっと中に入れた。大使館ではグルー大使以下、70人以上の館員が軟禁されていたが、公使を「解放者」のように喝采と共に迎えてくれた。皆、ラジオを奪われ、世界情勢を把握していなかったが、おぼろげながらも真珠湾での出来事を知っており、ある書記官は公使に米艦隊の損失を聞いてきた。公使が米に情報を伝えることが、将来的に日本側に禁じられる可能性もあり、公使は小声でそっと「アリゾナ」「オクラホマ」など沈没した艦名を伝えたが、これを聞くとこの書記官は茫然自失の体で、無言で立ち去った。

グルー大使は、開戦後の日本政府の自分たちへの屈辱的な扱いに苦情を述べた。

公使が大使と話している間も、警官が窓から覗いていた。警官が大使館の敷地に入っていたのなら国際法の重大な侵害で、それがグルー大使の言う「屈辱的な扱い」だったのは間違いなかった。公使はこのような警察官らの行為を外

務省に警告する心算だった。

この場でグルー大使と公使は今後の米大使館の食糧備蓄策を話し合ったほか、公使は自らが知る真珠湾攻撃の情報を伝えた。公使はこれら米大使館の様子とともに日誌に、「日本は宣戦布告なしに攻撃した。誠実義務の不履行で、良心的に非難される憎むべき罪だ」と書き (dodis.ch/50633, le 15 Décembre 1941)、後日「日本人が誇る『武士道』は嘲笑に値する」(dodis.ch/50633, le 17 Décembre 1941) とともに記している。公使はその後、何度も米大使館を訪れたが、警察が大使館の日本人使用人に対し、買い物に行くことを禁じたため、大使館では新鮮な食料の不足が続いた。また公使の抗議にも拘わらず、警察は米大使館の事務室に入り込んだほか、庭での「パトロール」も続けた (dodis.ch/50633, le 22 Décembre 1941)。

2.3 1942年

2.3.1 15カ国の利権代表

公使は1942年5月14日に本国に公電を送り、「現在、米を含む15カ国の利権代表を務めて」おり、いまの事務所では手狭であるうえ、「未開(人)のメンタリティ」(mentalité primitive)がある日本のような国では、米など敵国の利権を保護する公使を、人々が「敵国人」として遇する傾向がある、と仕事の難しさを訴えている (dodis.ch/51401)。またこれに先立つ4日付の公電でも公使は、仮にスイスが英の利権保護を引き受けた場合、公使館は手狭なうえ人員不足となる、と記した (dodis.ch/51400)。スイスは13日、英の利権代表にもなっている (DDS, vol.14 : 1182)。

日誌を見ると、開戦後、公使には中立国代表としての課題が山積していた。各国の利権保護活動では1月11日の日誌ですでに公使は、「仕事はあふれかえっている。外国、特に米の利権保護は非常に重い使命だ。事務能力のある人材が欲しい」と述べ (dodis.ch/50633, le 11 Janvier 1942)、18日には、活動の一環である日本の敵対国の公館の訪問で「法外な時間が失われる」とも書いている。法外な時間が失われるのは、軟禁状態の外交官の士気を維持するよ

う聞き役に徹したため、「しばしば必要以上にそこ（公館）に留まる」のが理由だった（dodis.ch/50633, le 18 Janvier 1942）。公使は、1942年前半、米以外にも日本での利権保護活動を求められた他の外交団も定期訪問しており（dodis.ch/50633, le 21 Février 1942）、夜間残業も増えた（dodis.ch/50633, le 18 Janvier 1942）。また3月には米大使館勤務の日系米人の通訳が米大使館の門内で警察に拉致される事件も発生し、公使はこれに対しても外務省に抗議するなど奔走している（dodis.ch/50633, le 25 Mars 1942）。

Gorgé公使の仕事には、米国人など日本在留の敵国国民帰還のための客船（交換船）出発に向けた、外務省や軍部などとの交渉も加わった。だが北米向けの交換船の準備は1月下旬に始まったものの（dodis.ch/50633, le 26 Janvier 1942）、乗船者約250人の人選などで、遅々として進まなかった。公使の訴えにも関わらず、軍部は捕虜収容所にいる負傷者の帰国を認めないうえ、目の不自由な人間の帰国すら拒否したという（dodis.ch/50633, le 4 Avril 1942）。北米向け交換船「浅間丸」の出航に向けた準備交渉で公使は多忙を極め、5月20日の日誌には、自分の頭は帰還者の人名と人数で一杯であり、衰弱しきって公使館に戻るのも一度ではない、と記している（dodis.ch/50633, le 20 Mai 1942）。公使の日誌によると、「浅間丸」は6月中旬に横浜を出港することができた（dodis.ch/50633, le 18 Juin 1942）。

英国民を主対象とする交換船の手配でも公使は奔走した。7月下旬に英国民ら約450人が客船「龍田丸」で捕虜交換地のポルトガル領東アフリカに向け出港するが（郵船OB氷川丸研究会 2008 : 268-270）、公使は出発する英国民のために、彼らが日本で使用した自動車などの財産の売却のために力を尽くした（dodis.ch/50633, le 3 Juin 1942）。乗船者はペット同行が禁じられていたようで、公使は英大使館付きの武官からその飼い犬を引き取ってもある。この際、英国大使夫人は、籠（panier）に自分の飼い犬を隠して連れ帰ったという（dodis.ch/50633, le 29 Juillet 1942）。

また公使には日本の敵国の捕虜や一般抑留者が入る日本国内の収容所訪問の仕事もあった。公使は2月下旬に横浜と浦和など東京近郊の抑留者収容所をス

イス人聖職者と訪問している（dodis.ch/50633, le 24 Février 1942）が、この前後、公使は外務省に自分が把握していない収容所の存在や（dodis.ch/50633, le 22 Février 1942）、粗末な収容所の食事についても抗議している（dodis.ch/50633, le 9 Mars 1942）。このような公使らの利権保護や交換船の準備活動に対し、米は1943年2月18日付でベルンの米公使館を通じてスイス政府にその「精力的で素晴らしい方法」での活動を感謝する旨を伝えており、その際の米の文書はDodisに残っている（dodis.ch/51402）。

2.3.2 初空襲とミッドウェー沖海戦

米は4月18日朝、洋上の第18機動部隊の空母「ホーネット」からB25爆撃機を発進させ、同日午後零時半ごろ、東京、川崎、埼玉、名古屋、大阪などを銃爆撃、全国で87人が死亡、約500人が重軽傷を負う打撃を与えた（東京新聞 2021）。米の本土初空襲が日本側に与えた心理的衝撃は大きく、ショックを受けた山本五十六連合艦隊司令長官はアリューシャン諸島からミッドウェー島を結ぶ線上に米機動部隊が存在する可能性が高いと指摘、そのせん滅作戦の実施を強く主張した。結局、この主張に基づく作戦が6月4日のミッドウェー沖海戦を招き、そこでの日本側の大敗北をもたらすことになる（林 1997 : 282-285）。

Gorgé公使は4月20日付けの公電でこの東京初空襲を報告し、「空襲目的は日本側の防空体制の確認が目的との見方が強い」と記している。また当時の状況について、公使は公電で、空襲は警報のサイレンが鳴る前に始まったと記載し、空襲時、米大使館のグルー大使を訪問中だったが、空襲終了前に米大使館を出て公使館に戻ったところ、公使館の門前を2人の警察官が警備しており、非常にありがたかったとも書いている。一方、軍部について公使は「白昼に敵機が防空ラインを突破したことに不快感を隠せない」と報告、東京はその夜、灯火管制が敷かれ、暗闇の中、警戒警報のサイレンが何度も鳴ったと公電に記している（DDS, vol.14 : 574-575）。

初空襲の様子は日誌にも詳しい。18日の日誌によると空襲直後、街の状況

を見に公使館を出た公使は、人々が興奮して「あらゆる方向に走る」(*courant dans tous les sens*) のを見たほか、青山一丁目(現渋谷区)の道路では憲兵隊が道路を封鎖し、大渋滞が起きるなど、爆撃後の東京は「筆舌に尽くせない混乱ぶりだった」(*Le désordre est indescriptible*) と記している。公使館の近くで顔見知りの日本人獣医に会ったが、その獣医は英語で「特に(小)学校が被害にあった」と述べた。また新聞も「米は特に(小)学校を狙った」と報じたが(*dodis.ch/50633, le 18, Avril, 1942*)、当時、東京では国民学校が機銃掃射され、児童が死亡している¹⁵。公使は翌19日の日誌で、「日本は制空力が弱い」「不幸なのは警戒警報が出た時は、すでに空襲が終わっていたことだ」とも述べている(*dodis.ch/50633, le 19 Avril, 1942*)。

一方で、ミッドウェー海戦についてGorgé公使は6月8日付けの日誌で、「ラジオがミッドウェーで重要な戦闘が起きたと知らせた。米にも損失があったが、日本にとって壊滅的な失敗だった。日本の空母2～3が沈没した。日本の公式発表はない」と記載している(*dodis.ch/50633, le 8 Juin 1942*)。海外からの短波放送を聞いたとみられるが、公使らが短波放送で海外情報、特に米国の情報を得ていたことは日誌の至る所で示されており、例えば公使らはスイスからの放送(例えば*dodis.ch/50633, le 28 Mai 1942*)や、ルーズベルト米大統領の国民向け放送である「炉辺談話」も聞いていた(*dodis.ch/50633, le 30 Avril 1942*)。ラジオのおかげで公使らは、国際情勢から遮断されてはいなかったのである。

ミッドウェー海戦で、日本側は空母4、重巡洋艦1、航空機322、兵員3500人を失う一方、米側の損失は空母1、駆逐艦1だった。日本側の惨敗だった(林1997: 285)。

2.3.3 極東でのスイスの活動

ミッドウェー海戦での大敗後も日本は、豪州領ニューギニア島南部のポートモレスビー(現パプアニューギニア)と、豪州北東の英領ソロモン諸島(現ソロモン諸島)の攻略に固執し、6月と8月、ソロモン諸島のガダルカナル島に、また7月と8月、ニューギニア島に上陸した。だが米軍は8月ガダルカナ

ル島に上陸し、日本軍を掃討したほか、日本軍はニューギニア島でも米豪軍の追撃に会い、1943年初頭までにはガダルカナル島からの撤退を決めた。ニューギニア島では一部の日本軍部隊が壊滅した。陸軍は米軍の反転攻勢を1943年以降と考えており、予想より半年以上も早い米軍の反攻だった（林 1997 : 285-289）。

1942年8月7日、公使は本国に公電を送り、日本や日本占領地での公使館やスイス人の状況を描いている。それによると、8月1日のスイス建国記念日に公使館に集まったスイス人らは戦時下の状況をあまり嘆かず、達観していたが、公使は外国人への猜疑心が支配する日本の中にあっては、日々、安穩に生活できるわけではないと記した。公電によると、当時日本では同盟国、中立国問わず外国人が国内を移動する際は、事前に警察に届け出なければならず、英語で電報を送る際も、事前に憲兵隊の検閲が必要だった。外国人の食糧状況は、「自助努力による備蓄」で幾分改善されたが、当時、商店の前には長い行列ができており、公使は自助努力にも限界があるともしている。

アジア一帯に目を向けると、開戦以来日本軍に占領されていた香港、マニラ（フィリピン）、シンガポールの領事とは手紙や電報で連絡を取ることができ、現地の状況は困難を極めるものの、絶望的ではないと公使は記した。フィリピンとは日本軍経由で郵便物の授受が可能で、検閲はあるが、公使は「現地との連絡が取れて満足だ」と記している。

だが一方で公使は、これら日本占領地に住むスイス人の状況は、今後悪化する可能性があり、その場合はスイス人全員の本国送還を考慮すべきだ、とも述べている。公使は、日本が今後さらに勢力を広げるだろうとし、日本はその独占欲などから至る所に「はびこり」、仮に現在、日章旗がたなびく場所に将来的にも日本がい続けるなら、「極東での外国人の時代」は終わるとも、公電で述べている（DDS, vol.14 : 727-729）。

2.3.4 東条との対話

前述のように、その官僚的な態度から Gorgé 公使の反感を買った東郷外相

は、日米交渉では最終局面まで「非戦・現状維持」を訴え（林 1997: 253）、開戦回避に尽力した（ブリタニカ 東郷茂徳）側面もあった。東郷は開戦直後の1942年1月の衆院予算総会では「講和への準備と覚悟あり」と答弁してもおり、政府内で一人、「中国問題の解決」を訴えてもいる（林 1997: 281）。その東郷は、同年9月、東条らが推進した大東亜省設立の動きに反発し、辞任した。大東亜省はジャワ、フィリピンなど占領地で構成される、いわゆる「大東亜共栄圏」での在留日本人に関する事務、移民、文化事業を管理するのが目的で、同年11月に発足したが（ブリタニカ 大東亜省）、これを外務省出身の東郷は外務省の権限が縮小されると批判し、辞任したのである（林 1997: 253）。

東郷辞任後、首相の東条が16日間ほど外相を兼務した¹⁶が、9月14日に公使は東条と会談し、その内容を15日付けの公電に残している。当時、スイスの大きな懸念はスイスなど中立国の国民に対する日本政府のとり扱いで、会談で公使は以下の3点の懸念を東条に示した。

1) 中国（の日本支配地域）でスイス人は敵国の人間の様に腕章をつけねばならない。だが、独伊両国民はそれが免除されている。

2) 蘭領インドシナ（蘭印）のジャワ島で独伊両国民は税金が免除されているが、スイス人は高い税金を支払わされている。

3) 日本で独伊両国民は一定限度の地域内を自由に移動できる永続的な許可をもらえるが、中立国民は目的地までの移動許可を（いちいち）県レベルで申請しなければならない（DDS, vol.14: 774-775）。

ジャワ島は3月以来、日本が占領していた（林 1997: 280）。

東条はGorgé公使の言葉をメモに取っていたが、日本と共に戦う独伊の国民が「一定の利益を得るのは当然だ」と答えた。公使はまた、日本におけるスイスの企業（maisons suisses）の活動が徐々に制限され、これを外務省に訴えたものの、改善に向け大きな進展がないとも述べたが、東条は戦争に勝つために経済統制の必要があり、企業の一部は犠牲になると言った。当時、繊維工場の多くが軍需工場に転用されていたが、東条はこれに対しても、重工業発展のために繊維産業を制限するのは仕方ない、と戦時の統制経済を説明した。さらに東

条は、スイス人もこの状況下で（様々な）犠牲を払うのならば、他の外国国民以下の扱いは受けなかったうえで、スイスが今後一層、日本のために貢献するなら「これ以上のことはない」と述べている。この時東条は自分が20年前、訪問したスイスを賞賛している。

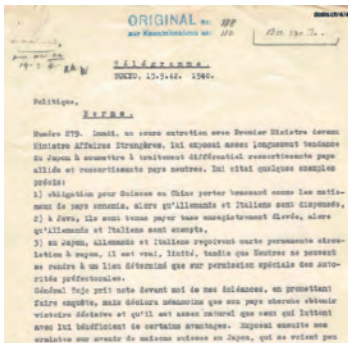
一方、東郷辞任について東条は、「個人的な事情だ」と断言し、東郷の辞任でも日本政治は何も変わらないとも述べている。だが公電で公使は、東郷は大東亜省設立で外務省がかなり縮小するため、外務省出身の東郷はそれに加担したくなかった、という見方があると併記した（DDS, vol.14: 774-775）。上述のように、まさにその通りで、Gorgé公使の情報が正確なことがここでもわかる。公使は東郷がよほど気に入らなかったらしく、東郷について「だれもこの冷たく、感情を表に出さない大臣の辞任を悔やんではない」とも公電で報告している。会談で東条は米などの敵対国で、スイスが日本の利権代表を務めていることに非常に感謝し、最初から最後まで誠実な態度だった（DDS, vol.14 : 774-775）。

公使のこの時の日誌によると、会談で東条は帯刀の軍服姿で、自信があり樂觀的な雰囲気を出していた。この時、東条は会談後の握手のあとで「マスクをまとったような」微笑みを浮かべて、公使をドアまで見送ったともいう。一方、公使は東条を「非常に働き者」だとも述べ、東条が朝早く、通学途中の

小学生に話しかける様子を報じた新聞記事があることを記している（dodis.ch/50633, le 14 Septembre 1942）。この東条と公使の会談を記したスイス外交文書について、筆者はジュネーブ特派員時代にその一部を新聞で報告している（毎日新聞 1998 a,b）。

写真④は東条との会談を報告する公使の公電である（dodis.ch/47422）。

東条の兼務の後、外相には9月17日、外務省出身の谷正之が就任した¹⁷が、公使は



写真④：東条との会談を報告する公使の公電

谷にも面会している。日誌によると、外務省出身の谷を公使はよく知っていたが、東条に述べたのと同様、ジャワ島などでのスイス人に対する日本の差別的な扱いに苦情を言うと、谷は「知らなかった」と述べる一方で、外国人の優遇措置は、慣例・協定 (*voie conventionnelle*) に反しない限り、その国の政府に権限があると話した。谷が占領地で軍政を敷く軍部を慮っていたのは間違いなく、終始微笑みを浮かべる谷に公使は「彼は（スイスの抱える）問題に介入する気はない」と失望し、辞去している (*dodis.ch/50633, le 6 Octobre 1942*)。

2.3.5 近衛との対話、及び当時の日本の状況と外交団の様子

これに先立つ8月、長野県・軽井沢に避暑に訪れていたGorgé公使は、やはり軽井沢にいた近衛と会談している。9日の日誌によると、夫妻で近衛邸を訪れた公使は、公使だけが近衛の「書物と貴重な骨董品に囲まれた」書斎に招かれた。そこで近衛は青い、中国の官僚が着る服 (*mandarin chinoise*) を着、微笑みながら、流ちょうな英語で応対した。だが前年10月、東条に政権を譲った近衛 (藤原 1994: 401-405, 418) は、公使によると「劇的で疲弊する冒険から脱したばかり」で、無遠慮な質問、即ち、公使が非常に興味を持つ近衛の首相当時の経験や日本の膨張主義、近衛が行った日米開戦阻止の努力などを蒸し返す雰囲気ではなかった。

このため2人は、生活物資の困窮などの経済問題を話し合ったという。公使は各県をまたぐ流通がうまくいかないため、生活必需品が窮乏していることを話題にしたが、近衛は眉をしかめ、「分配がうまくいかないための混乱 (*gabegie*) だ」と説明した。一方で公使は自分がかつて滞在していた1924年と現在の1942年を比べ、「日本は世界で最も礼節ある国だが、昔のそれは失われてしまった」「いまその礼節が残るのは鉄道だけだ。駅長や車掌は外国人に対してもいまだ平等に親切だ」と述べた。この発言を近衛は驚いたように聞いていたが、逆に公使は実に楽しい会話だったとも記している。近衛と公使は戦時下での日本の生活について、この時、長々と話し合った (*dodis.ch/50633, le 9 Août 1942*)。

1942年後半には市民生活の窮乏がすでに始まっていた。日本におけるスイス人などの状況に触れた上述の8月7日の公電で公使は「商店の前には長い行列ができています」とも書いていたが、10月24日の日誌では「飢餓の脅威が門前まで迫っている」「全てが不足しており、占領地からの貨物船はことごとく敵の潜水艦に撃沈され、何も届かない」とも書いた。各商店の前には物資を求める人々の「際限のない行列」が続き、すでに「天文学的な値段」を示す闇市も繁栄していた。鉄の供出も始まっており、美しい公園からは鉄柵が持ち去られ、寺院からは角灯が消えた (dodis.ch/50633, le 24 Octobre 1942)。

この時期の日誌で公使は各外交団の様子も記している。北アフリカ戦線・アラマイン（エジプト）での戦いで独軍が負け、同戦線での独伊軍の敗退が始まった11月上旬 (Parker 1997 : 105-106, 178-180)、公使は伊大使と言葉を交わしたが、伊大使は悲観しておらず、「見るがいい、我々は彼らに反撃する」(vous verrez, …nous foncerons à notre tour sur eux) と発言し、同戦線では独と米英の一進一退の激戦が続くと断言した (dodis.ch/50633, le 7 Novembre 1942)。興味深いのは、緒戦で独に敗北した結果、独の傀儡であるヴィシー政権を代表する形となっていた仏大使館の様子で、連合国派の大使館付武官は独の敗北に上機嫌な (dodis.ch/50633, le 6 Novembre 1942) 一方、ナチス・ドイツの傀儡であるヴィシー政権を「100%」支持するアンリ大使は非常に不機嫌で、冒涇的な言葉で米を罵倒した。この際、Gorgé公使は驚き、「この知性的で、傑出した仏文化の代表者がヒトラー勝利を熱望するとは」と書いている (dodis.ch/50633, le 9 Novembre 1942)。

仏の大使館内では枢軸国派、連合国派が分かれていたのである。

驚くべきことに、この間、スイスは上述の交換船を使って、外交官など職員5人を本国から公使館に増員している (dodis.ch/50633, le 21 Août 1942)。各国の利権保護など東京のスイス公使館の業務が増えたためだが (DDS, vol.14 : 729)、大戦期の中立国スイスの、胆力ある外交姿勢を示すエピソードだ。

日本の言論統制は厳しくなっていた。1941年12月の言論出版集会結社等臨時取締法の成立を機に、戦況の報告は、ほとんどが「大本営発表」が占め

るようになった（林 1997 : 314-315）。このころの日誌で、公使は日本政府の公式発表は要注意で、現実を極端に歪曲した勝利を強調していると述べていた（dodis.ch/50633, le 7 Octobre 1942）。

2.4 1943年

2.4.1 連合国の攻勢と3本の公電

1943年前半には連合国側の攻勢が一層、明らかになり、独は北アフリカ戦線の敗北に続き2月、スターリングラードの包囲戦で敗退した。一方で日本は、ニューギニア、ソロモン諸島の攻略にこだわり、4月にはニューギニア島東部やガダルカナル島の空襲を行ったが、この中で連合艦隊司令長官、山本五十六が戦死した。ニューギニア島でも7月以降、日本軍の敗走が続いたほか、米領アリューシャン諸島のアッツ島を占領していた日本軍は、5月30日、壊滅した。欧州戦線では9月に伊が戦線を離脱している（林 1997 : 336-345）。

この間の1943年1～7月間にGorgé公使が送った公電はDDS、Dodisで確認できる限りで2月6日付け（DDS, vol.14 : 991-993）、6月11日付け（DDS, vol.14 : 1181-1182）、6月30日付け（DDS, vol.14 : 1183-1198）の3本がある。これら公電で公使は当時の日本の社会、政治、外交、経済などの状況を総合的に分析しており、特に6月30日付の公電はDDS文書で約16頁に渡る詳細なものだった。3本の公電を基に、以下、項目ごとに公使が見た当時の日本の状況と、それに対する公使の分析を概観しよう。

2.4.2 東条内閣と議会

公使が上述の3番目の公電を送った1943年6月30日の時点で、東条は首相のほか陸相、軍需相を兼務する¹⁸など内閣で絶大な権力をふるっていた。さらに1943年3月、戦時行政職権特例（勅令第133号）が施行され、こと軍需物資に関しては、東条は各大臣への指示や、各大臣の職務を自ら執行できる強大な権限が与えられてもいる¹⁹。

明治憲法下での首相（首班）は当時、「同輩中の首席（primus inter pares）」

と理解されていた²⁰が、東条を取り巻くこのような状況にGorgé公使は6月11日付けの公電で、「これまで天皇にのみ責任があった各大臣は、東条に対し責任を負う形になった」と指摘、東条はもはや「同輩中の首席」ではなく、日本の最高責任者（chef）となってしまったと断言した。また公使はこのような東条への権力集中は、明治憲法の「大胆な刷新（innovation hardie）」であり、この変革は日本の政治風土の中であって、非常に深刻な（assez profonde）ものだとも述べている。かつて日本政府に法律顧問として招かれた経験がある公使らしい分析である。一方で公使は公電で、東条が自らをヒトラーの様な独裁者ではないと主張したとも報告し、「自分はあなた方同様天皇の臣民だが、首班として非常な責任があり、戦争に勝つために権力が必要だ」と述べたとも記している（DDS, vol.14:1185）。東条は同様の内容を1943年2月27日の衆院戦時行政特例法委員会ですべており（東条 1943: 108-109）、公使が当時の政治状況を正確に把握していることが分かる。ちなみに同委員会では、東条は自らを「臣民」ではなく「草莽の臣」と表現している（東条 1943: 108-109）。

1942年4月の衆院選挙では、東条を支持する勢力が大量当選を果たし、議会は「東条内閣の翼賛議会」となっていた（林 1997: 301, 312-313）。この状況について公電で公使は、昨日までの（弁士が口角泡を飛ばす）騒がしい状況は影を潜め、いまや議会は「従順」になり、専制主義的な国家では「もはや自由な討論は不可能だ」と述べた。これと同時に公使は京都（帝国）大学法学部教授の「政治的自由主義は一掃された」という言葉も紹介している²¹。また公電の中で公使は、もはや議会は政府の歯車に過ぎず、政府の（即ち東条の）提案ならば何でも認める、と指摘する一方で、議会は今でも政府が提出した法案を各委員会でも審議しているが、これは言論の府の体面を繕うためのものだ、と皮肉っている。つまるところ公使にとって日本の議会は、政府の「弁護人」として日本の政治と指導者を賞賛するものとなり、「東条將軍にとってこれ以上は望めない支え」となったのである（DDS, vol.14: 1185-1186）。

公使は東条が築いた独裁体制を法律の専門家としての見地から見抜いていた。

2.4.3 隣組と国民生活

統制経済で軍需産業が優先される中、消費生活が圧迫され、非軍事面での生産が大幅に縮小される一方で、政府は1942年春、軍需産業の資金確保のため、金融統制会を設けた。公債の売却促進のためである（林 1997 : 383）。

このような経済状況について公使は公電で、公的権力の手が社会の至る所に広げられ、動産や不動産の売買などあらゆることに政府の許可が必要だ、と書いた。この上で公使は、政府は国民がカネを使わないことを望んでおり、商業活動が停滞する一方で、間接税は上がり、上述の公債についても政府は半ば強制的に国民に購入を迫っている、と報告している。例えば、公使が知るある不動産取引のケースでは、買い主は売買価格の80%を公債で支払わなければならない、それを受け取った売り主が公債を現金化するのにも政府の許可が必要だった（DDS, vol.14 : 1187）。

こんな中、政府による公債売却で公使が注目したのは、隣組のシステムだった。内務省は1940年9月、部落会町内会等整備要領を出し²²で、国策遂行の下部組織としての隣組の組織化をはかっており、隣組は防空演習や主要物資の配給、出征兵士の歓送、金属回収などの行動などあらゆる面で国民生活に組み込まれていた（林 1997 : 177-179）。

Gorgé公使は公電で「tonarigumi」について、「食料などの供給のカギを握っており（加入しない場合）米も魚も野菜も手に入らない」と説明したうえで、公債購入では税務署が各々の隣組に目標額を示し、各隣組の拠出金を国は「市民の自発的協力（金）」として受け取る仕組みだと報告した。また公使は、隣組内での分担額を払わない家庭は即刻、食料配給が滞り、電気を切られる可能性があるとも指摘し、隣組は「そこそこで怒りと涙を生んでいる体制」だとしている。だが一方で公使は、隣組全体の目標額を一人で引き受ける富裕層もいると報告し、このような犠牲はスイスではまれだろう、とも指摘している。

公使は、厳格な隣組組織のおかげで戦費かなりの部分がカバーできたとし、政府の公式資料を基に、1942年の公債購入額は前年の4倍近くの155億円、1943年の場合3月に230億円に達し、目標が達せられたと報告している。公使

はこう書く。「政府はこれらを国民の寄付ではなく、『貯蓄』であると称している……だがそれは、強制されたもので現在のところ換金できない。(公債購入の押し付けは) 形を変えた徴税だ」。

公電で公使は、警察官が隣組の個々の家の経済状態を調べ、節約を説いており、市民を怖がらせているとも報告している。公使の言葉では、隣組は「異端裁判」の場所を提供してもいたのである。だが公使はこの「異端裁判」は大衆に対するもので、富裕層など権力のある者はそれを逃れている、とも指摘している。公使によると「臣民」は一般的に収入の3割以上を生活費に充当してはならず、(残りは) 税金や公債購入のためとり置かれていた(DDS, vol.14 : 1187)。公使が見た、隣組などを通じ収入の多くを拠出させられた当時の庶民の状況は、最近の報道でも裏付けられており²³、公使の微に入り細を穿つ、社会観察の正確性がわかる。

公電では当時の物不足についても語られている。公使によると、公使館では悪い品質の石炭すら入手が困難になった(DDS, vol.14 : 992-993) ほか、金属徴収のため町の至る所で銅像が撤去され、眼鏡商は眼鏡のフレームまで拠出した(DDS, vol.14 : 1181-1182)。どこかの商店にいても「ありません」(Arimasen) と言われ、「ありません」は1943年、「最もよく使われる言葉」となった。全ての物資が軍隊に回されるため、粗末な半長靴ですらすぐに、非常な贅沢品になりそうでもあった。かつて新鮮な青果や米、魚を供給していた露店には何もなく、それでも婦人たちはその前に長い行列を作っていた(DDS, vol.14 : 1190-1191)。

一方で、公使は日本の状況について概要、以下のようにも報告する。

子どもたちはぼろをまとって学校に通い、娘たちは長靴下も履かず、婦人たちは、それが警察によって「贅沢品」とされたため、古い帽子ですら着用を憚っている。国民の半分が結核に罹患しているとされ、学校や工場では体操を盛んに行うが、この栄養失調の状態では、体操で病気を食い止められるのだろうか。人間の体力、精神力にも限界があり、何百万人もの国民は、それを表には出さないものの、終戦を待ち焦がれている。社会の印象はまさしく貧困国のそれで、

ただ大銀行の建物がかつての繁栄の名残を留めている。

「何にもまして、陰鬱」

公使は当時の日本の雰囲気をご電でこう表現していた（DDS, vol.14 : 1190-1191）。

2.4.4 外国人監視と日本人の「外国人嫌い (Xénophobe)」

公使によると当時の日本では外国人への「病的な猜疑心」も日々高まっていた（DDS, vol.14 : 992）。この猜疑心は同盟国、敵対国、中立国の如何を問わないものだったが、公使も指摘するようにこの理由の一つにはゾルゲ事件もあったと思われる（DDS, vol.14 : 1194-1195）。独人記者であるゾルゲが1941年、ソ連のスパイとして逮捕され、翌年処刑された事件（ブリタニカ ゾルゲ）である。

1943年2月6日の公電によると、あるスイス人は、戦意高揚の日本映画を見ただけでスパイ行為に当たると警官に警告されたが、公使は、これは下級警察官の不躰で職務権限を超えた行為だ、と批判している。また公使館で使うため館員が中国から持ち帰ったラジオは長崎での通関の際、税関吏によって意図的に壊されてしまい、同じことはやはり中国から伊大使館員が持ち帰ったラジオにも起きた。一方、郵便局の職員は公使のラジオを精査するために公使館を訪問したい旨、伝えてきたほか、大蔵省の役人も固定資産税の査定を口実にやはりラジオ点検のために訪問したい様子だったが、いずれも公使は断固、断っている。その理由の一つとして公使は「外務省の見解に反する」としているが（DDS, vol.14 : 992-993）、その主張の背景には外交特権があったと思われる。在日スイス人に限ってみると、1942年9月には反ナチスを標榜していた1人が、また1943年1月には、政府の禁止にも関わらず短波ラジオを所持していた2人がいずれもスパイ容疑で逮捕された。前者は終戦後の1945年8月28日に釈放され（DDS, vol.14 : 992）、後者2人は公使の奔走で数か月後に釈放された（dodis.ch/50633, le 29 Juillet 1943）。

一方で、6月30日付け公電で公使は、日本に長く住むあるスイス人が、路上で日本人に「毛唐」(keto) と呼ばれる回数がひどく増え、驚愕していると報

告した。このスイス人は「自分が怖いのは米の空襲ではなく日本人だ」と話したといい、公使は関東大震災後の朝鮮人虐殺事件に触れながら、「大災害を前にすると外国人への日本人の憎しみは極端になる可能性がある」と述べている。

Gorgé公使は、外国人は皆、厳しく監視されており、その監視は警察に限らず、日本人使用人が行う場合もあるとして、ある日、業を煮やしたルーマニア大使が使用人たちを集め、こう語ったと公電で記してもいる。「あなた方は皆、警察に買収されているが、私はあなた方に警察より多く報酬を支払っている。2人の主人のどちらにつくか選びなさい」。監視の目は至る所にあり、デンマークの外交官はある夕食後、タバコを吸おうと外に出たが、家を出てすぐ警官に尋問され、数歩歩くと別の警官の尋問を受け、さらにこの後、また警官と顔を合わせた。これ以降、この外交官は家でタバコを吸うようになったという。

警察が日本人に外国人宅の訪問を禁じた例もあり、日本人外交官の夫人たちは、一部の大使館の茶会に参加するのにも警察の許可が必要にもなった。外国人と接する日本人は監視され、「アフガニスタンであれ仏であれ」、どこかの国の大使館に行く日本人は「壁に身を隠しながら」そこに近づかなければならなかった。スイス公使館の外では、警官が屈託ない様子で館員に「日本は戦争に勝つと思うか。もしそう思うなら、なぜか」「山本長官の死を米側が伝えたのを知っているか」などの質問をすることもあった。公使にとって、外国人がスパイ行為を働くという考えは、日本人の「強迫観念」だった（DDS, vol.14 : 1194-1195）。

1943年1月、独のオット大使が更迭されたことが分かったが、後任の大使が赴任したため、出国までオット大使は居場所がなかった。これに対し日本側は手を貸さず、公使の骨折りでトルコ大使が住居を提供した（dodis.ch/50633, le 13,18 Janvier 1943）。公使は、日本人は同盟・非同盟の如何を問わず、要するに「本質的に外国人嫌い（xénophobe）」だと批判し、江戸時代の鎖国の例をあげ、この「民族的な気質」は江戸時代から当時まで続いていると記している（DDS, vol.14 : 1196）。

2.4.5 日本の帝国主義とその末路

この6月30日付けの長文公電で公使は、日本分析の結論を概要、次の様に述べた。

日本人は自らを神の子だと確信しており、その使命はアジアを占領し、その運命を決めることだ。日本人は表面上「アジア人のためのアジア」を標榜するが、その実は「日本人のためのアジア」だ。日本人にとって唯一のライバルは白人だが、日本人は、白人はアジアに地歩を築くべきではないと考えている。大陸ではまだ中国人が抵抗を続けているが、それは白人の支援によるもので、日本人は自らを大陸での唯一の支配者であるべきだと考えている。日本は、アジア各国の独立を前提にアジア新秩序を構築すると言うが、満州国の状況を見れば、ニッポンの帝国主義が各国の独立など意に介していないのは明らかだ。

大東亜共栄圏の設立でアジア各国が利益を得る局面はあるかもしれないが、歴史を見ると、人々はリボンで飾られた轡（くびき）より貧困の中の自由を選ぶ。独立のための犠牲を厭う民族はいない。自由は極めて崇高なもので、この考えが中国人の間に染み渡っている可能性は高い。仮に中国での戦いに勝利したとしても、そこで日本が中国に押し付ける協力関係には非常な困難が付きまとうだろう。この広大な大陸では独立の精神が潰えておらず、そこでは日本人の「優越性」など全く受け入れられていない。

日本は目的遂行のために必死の努力を行っているが、負担は国民に重くのしかかっている。国民には限界と疲労が感じられるが、日本はまだ大規模空襲の恐怖すら知らないのだ。死者のリストの終わりは見えず、最悪の事態はすぐそこまで迫っている。物量的に日本の勝利は不可能だ。独が崩壊した場合、日本は壊滅する。仮に独が勝利をもぎ取った場合、日本は中国で勝利し、大東亜共栄圏を建設できるかもしれないが、それも非常な困難が付きまとう。（その場合）大陸では独立戦争が起きるだろう。それは外国の占領を忌み嫌う何百万の人々と対峙する、長く、困難な消耗戦になる。日本の将来は、暗い（DDS, vol.14: 1196-1198）。

Gorgé 公使がこの公電を綴ったのは終戦の2年以上も前だが、この時点で大

東亜共栄圏の欺瞞性やアジア各国の独立への渴望を見抜き、本土大空襲や日本の敗戦などを予測し、それらを全て本国に伝えていた公使の慧眼には見るべきものがある。

2.4.6 伊の降伏と日本占領地のスイス人

1943年9月8日の伊と連合国の休戦協定締結（油井、古田 1998 : 99）は第二次大戦史上の大きな転機だったが、これを公使はどう見、伊降伏への日本や在日外交官の反応は公使の目にどう映ったのだろうか。

伊では7月10日、連合国が南部・シチリア島に上陸し、同月25日には王権と軍部のクーデターでムッソリーニを追放・逮捕したが（油井、古田 1998 : 98-99）、公使はすでに6月14日、連合国がシチリア島周辺の島を奪還すると「（連合国の勝利への）希望に震える」と日誌に書く一方で（dodis.ch/50633, le 14 Juin 1943）、8月5日の日誌では、ムッソリーニ失脚を報じる現地からの同盟通信電がこのニュースを矮小化し、「伊の政策は今後も変わらない」と報じたと記している。公使によるとこの報道はムッソリーニの失墜を「単なる一大臣の追放」の様に描いており、公使は、「（この報道を）信じるのは本物の愚か者だ」と皮肉っている（dodis.ch/50633, le 5 Août 1943）。

だが、ムッソリーニ失脚に対する日本側の動揺は明らかで、公使はある会合に出た東条が「敵はあなどれない」と語ったと記し、その会合の参加者はうろたえただろうと書いた（dodis.ch/50633, le 7 Août 1943）。また公使は、外務省も表には出さないものの、ムッソリーニ失脚は日本への大きな打撃であることをよく知っている、とも指摘している。日誌によると8月12日、当時の外相、重光葵と独・伊の駐日大使が会談したが、公使は、この時、伊大使は、「ファシズムは権力の座に長く居座りすぎてだめになった」と考えていただろうと書いた（dodis.ch/50633, le 19 Août 1943）。伊では1943年初めから野党勢力が独裁政権への抵抗を強めていた（油井、古田 1998 : 99）。

だがその後、公使が直接、伊大使に「戦後」について聞くと、伊大使は「本国は全てを破壊され、失うものもなく、いま戦争をやめても得するものはな

い」と、現地で激しい空爆を行った連合国軍を責めるような口調だった。この時公使は、同盟国日本にあって、伊大使は（自分の立場から）心情を吐露できないのだろう、とも書いている（[dodis.ch/50633](#), le 21 Août 1943）。日誌によると9月の伊降伏の際、日本政府は「伊の裏切りは日独の必勝の信念を強めた」との発表を行い（[dodis.ch/50633](#), le 5 Septembre 1943）、その後の10日にある日本の新聞は「伊はヒトラーの足枷だった」と述べていた（[dodis.ch/50633](#), le 10 Septembre 1943）。

伊が枢軸側の戦線から離脱した9月8日、公使は公電を本国に送り、蘭領のスマトラ、ジャワ島や英領のシンガポール、香港、米領のフィリピンなど日本占領地に在留するスイス人の状況を報告している。それによると、郵便状況は前年以上に悪化し、これらの地域と電報のやり取りはできるものの、シンガポールやジャカルタ（ジャワ島）、マニラ（フィリピン）、香港の領事館とは長文の手紙のやり取りはできず、日本軍がスパイ活動防止のため、数字を多く使った手紙を禁じたことも相まって、各領事館は東京の公使館に財政状況などの報告ができなくなっていた。

ジャカルタ、マニラ、香港などの各領事館は生活苦に陥った現地のスイス人への資金援助を行っていたが、ジャカルタの場合、その援助額は1943年1月～7月で3万3625⁷²と、前年の倍に増えていた。対象はのべ608人で、この中には外国人と結婚したスイス人も含まれていた。公電によると当時、シンガポール、スマトラ、ジャワ両島のスイス人には失業者が多く、日本軍が現地の銀行を閉鎖したため預金も引き出せないなど、その状況は悲惨だった。当時、仏印には農・工業で働き口があったため、公使は彼らが仏印に入れるようにビザ獲得に奔走したが、日本側はその協力に消極的だった（[DDS](#), vol.14 : 1329-1332）。

2.5 1944年

2.5.1 Business as usual.

日本国内では1943年秋、学徒出陣が決まり（林 1997 : 401）、翌1944年10月

には徴兵年齢が前年の19歳から18歳に引き下げられた。この徴兵の影響で日本は深刻な労働力不足に陥り、軍需産業の担い手がなくなって、11歳以上の生徒や学生、未婚の女子も動員された（林 1997：387-388）。一方、米軍は7月、日本軍3万人が守るサイパン島を占領、周辺のグアム、テニアン島も陥落させ、米はこれらの島々で飛行場を建設した。爆撃機B-29による日本本土爆撃の体制が整ったわけである（林 1997：359）。この少し前の6月16日には中国本土からのB-29による北九州爆撃が行われていた（林 1997：403）。ビルマ（ミャンマー）では7月、日本軍の敗走が始まり（林 1997：349-354）、最後まで権力に固執した東条も同月18日、辞意を表明した（林 1997：417-424）。11月24日には東京の空襲が始まる（油井、古田 1998：386）。もはや日本の敗戦は確実だった。

この間、Gorgé公使関係の公電は、公使館の年次報告書を除けば、当時の日本の状況を示した7月20日付けの1本にしかすぎない（DDS, vol.15：494）。だがこの時期のスイスの外交文書全般を見ると、日本との貿易や、各国の利権保護に関するものなどがあり、これらは、大戦中のスイス外交の実情を如実に示しており、非常に興味深い。

1944年4月5日、在ロンドン連合国代表部のスイス政府経済代表団は、スイスと日本の貿易に関して英米の代表部に回答書を送り、それを本国にも報告している。それによると、連合国は前年秋、スイスに日本との貿易を中止するよう要請していたが、スイス側は自国の中立政策から、「全ての国と商業活動を行う義務がある」として、これを断固拒否していた。だがこの一方で、スイスは、日本との輸出入では、スイスの経済利益のために「完璧な相殺関係」となるよう努力している（DDS, vol.15：316-317、文書は英文）²⁴、と述べている。要するに、日本が、ある物資の輸出をスイスに求めた場合、日本が同様・同量の物資をスイスに輸出していた場合に限り、スイスも自国製品の輸出を認めるという政策だ。例えば仮に、日本が最先端の技術を使ったスイス製砲弾1トンの輸出をスイスに求めたとしよう。その場合、スイスは、日本側がすでに同品質の日本製砲弾1トンをすでにスイスに輸出していた場合に限り、スイス側も砲弾

を輸出する、というものだ。

公電によると、当初この対象は軍需物資に限られていたが、1943年秋以降、機械や器具などにも対象が広げられた。この結果、1938年に3290万[㌦]、1942年に2220万[㌦]だったスイスからの日本への輸出額は、1943年に290万[㌦]となり、同年秋以降は9月に4万4000[㌦]、10月に2万1000[㌦]とさらに激減した。この傾向は1944年も続き、同年1月は4万5000[㌦]、2月は2万5000[㌦]だった。1943年秋以降、スイスが輸出したのは本、時計、腕時計だけで、日本側はこのようなスイスの政策に強く抗議したという。

公電はこのような現状について、スイスの対日貿易は結果的に「英米政府の要望に沿う形になった」と指摘、この政策を今後も続けると主張した。だがその一方で、今後も英米の要望通りに日本と貿易を中止することは（中立政策上）あり得ないと、再度、念押しをしている（DDS, vol.15: 316-317）。そこには中立国として、日本などの枢軸国、米英などの連合国、相互を慮らざるをえないスイスの苦しい立場が垣間見える。

一方、この時期、スイス本国では、日本やその占領地でスイスが行う各国の利権保護や、赤十字国際委員会の人権保護の活動に関し、その資金調達や資金の移動の方法についての議論が熱心に行われていた。この時、これら地域で日本が凍結したスイス資金をいかに取り戻すかも話合われていたが、この話し合いを記したスイス政府のDDS文書によると、日本が占領地の銀行を閉鎖したことなどで、極東では、スイス人の資産、約3600万[㌦]が少なくとも凍結されていた（DDS, vol.15: 30-31）。

欧州戦線を見ると、1944年8月25日、連合国によってパリが解放されたが（油井、古田 1998:112）、これを機に在パリのスイス領事が、枢軸各国の大使館の建物など、仏での今後の日独伊の利権保護について本国に打診している（DDS, vol.15: 594）。

中立国スイスの外交ビジネスは、戦争の進展如何に関わらず続いていた。

2.5.2 日本国内の状況：国民生活と小磯内閣

Dodis、DDSに掲載された文書の中で、1944年7月20日付けのGorgé公使の公電では、当時の日本の状況が概略、次の様に簡単に報告されている。

食糧や物資の調達はますます難しくなったが、軍需産業に国民が動員されて人手不足となったため、物資の輸送も滞り、これがモノ不足に拍車をかけている。一部のスイス人は、公使館が彼らの食糧事情の改善のために努力しないと苦情をいうが、日本人も全てが不足する中、とんでもない生活に耐えており、これらの苦情は大人げない。

米軍のサイパン島奪取は日本にとって衝撃で、人々が士気を失っているのは明らかだ。世論を満足させるためにも、内閣のすげ替えは必然で、数日前、東条（首相）の更迭が表明された。外務省の雰囲気はかつて見ないないほど陰うつだ。日本にとって戦争は深刻な段階に入り、東京を守るために様々な方策が実施されている。空襲の際の延焼を削減するために、古い家屋が地区ごとに取り壊され、各々の家の前には防空壕が掘られ、防空壕の入口は厚い板で覆われた。日本人は長いこと敵を侮っていた。だが今や戦争に向き合い、最悪の事態に備えつつある（DDS, vol.15 : 494）。筆者はこの公電の一部を報道している（毎日新聞 1997 b）

1944年の公使の日誌は、当時の社会状況をさらに具体的に描いている。1月、公使は、市民のバケツリレーの訓練を見たが、それは1つごとに男女が並び、「ひどく無気力に」（avec une flemme carabinée）バケツを回すものだった。列の最後に空のバケツが届くと、また「どうでもいいやという雰囲気」（j'm'en-foutisme）でバケツが先頭に回される。参加の女性たちは、周りにからかわれて笑ってもおり、公使の目には、この「消防団」は、万が一の時は何もできないような雰囲気に映った（dodis.ch/50633, le 17 Janvier 1944）。物価上昇は続き、開戦以来、ジャガイモの価格は10倍、米は2年で14倍になった。野菜は街から消え、「すし詰め」の（archi-bondés）汽車で行く買い出しでも、人々は多くの野菜は獲得できなかった（dodis.ch/50633, le 15 Avril 1944）。公使は交換船などを利用し、米から食料や薬品を取り寄せ備蓄していたが（dodis.ch/50633, le

12 Janvier 1944)、7月には最後の缶詰がなくなった。皆、「頬はこけ（痩せて）衣服がゆるゆる」になり、あるスイス人婦人は、子どもにミルクが与えられない、と公使に涙を見せた（dodis.ch/50633, le 20, Juillet 1944）。こんな中、公使は戦意に燃えるはずの日本の市民が埼玉県、東京都を流れる「荒川」での釣りに興じ、東京の渋谷、新宿の映画館前で行列を作るのを見た。公使の目には、政府は国民の心情を理解していないようにも映った（dodis.ch/50633, le 26, Juillet 1944）。

東条内閣総辞職の後、1944年7月22日に陸軍出身の小磯国昭が首相に就任した²⁵。戦争指導のため強力な指導力を得ようと、東条同様、陸相兼務を望んだ小磯（林 1997 : 427）に、Gorgé 公使は当初から多くを期待しなかったようだ。公使は8月21日の日誌で概略、小磯を次の様に評している。

小磯の長々とした演説（*harangues*）をまとめると、天皇は神で、臣民は神の子であり、天は我々と共にあり、地は大和男子が続べる、ということだが、その内容は東条同様冗漫、かつ同じ決まり文句の羅列で、小磯の考えは東条と同じだ。東条同様、アマテラス（*Amaterasu*）を祖先に持つ国民に感銘を与えようと信念を述べたてるが、その言葉は心に響かない。小磯は才能なく、目的にがむしゃらに突き進む軍人タイプだ。必勝の信念があっても、戦争は日本の全てを壊滅し、負けへと進む。彼が望むものは何も残っていない（dodis.ch/50633, le 21 Août 1944）。

小磯のこの演説の日時は日誌にはないが、日誌に先立つ8月8日のラジオ演説で小磯は、「宇宙絶対の神」である「皇祖天照大神」よりその位を預かった天皇は、また「宇宙絶対の神」であり、「官も、民も、一切を天皇陛下に捧げ」て「大和一致」すれば「人類最高の道義は確立」され、「大東亜戦争の勝利把握も期待し得る」と述べている²⁶。

結局、小磯は陸相兼務の望みを叶えられないまま、その内閣は翌1945年4月に総辞職した。理由の一つは、日本軍が大敗したフィリピン沖海戦に対する姿勢など、小磯の戦局の見通しが甘いことだった（林 1997 : 427, 435-436）。

2.5.3 日本国内の状況：外交団の生きざま

このような中、興味深いのは本国が政治的、軍事的に分断された伊、仏の大使館の様子である。伊では政権を追われたムッソリーニが独占領下の北部で復権し、「伊社会共和国」を樹立する一方で、1944年6月には米英軍がローマを解放、新政権が樹立された（油井、古田 1998 : 91-100）。

Gorgé 公使の同年5月10日の日誌によると、当時、日本の外務省は伊大使館を閉鎖し、伊の外交官を「犯罪者の様に」扱っており、公使には伊大使館に近づくことを禁じた。公使が得た情報では、伊の外交官は飢えに苦しんでおり、公使は使用人を使って、大使館への食料調達を試みてもいる（dodis.ch/50633, le 10 Mai 1944）。外務省は伊の外交官らに対し、ムッソリーニが樹立した「伊社会共和国」に賛同する場合は、自由になれると通告したが、公使の知る限りその賛同者は2人だけだった。公使は4月に赴任した「伊社会共和国」の代理大使に会い、人道的介入の意思を伝えたが、代理大使は冷淡で、伊ではまだムッソリーニ支持が多数派だとの説明を始めたため、公使は席を立っている（dodis.ch/50633, le 15 Mai 1944）。

仏では開戦以来、独が北部を、独の傀儡であり、ペタン將軍を国家主席とするヴィシー政権が南部を支配していた（Parker 1997 : 40-41）が、連合軍は1944年6月、仏北部ノルマンディーに上陸、8月26日にはドゴール將軍がパリに凱旋した（Parker 1997 : 195-203）。この中、1936年以来職にあった仏のアンリ駐日大使が1943年に死亡し²⁷、後任大使が赴任したが、その後任大使の態度は微妙だった。1944年5月、この大使は公使に概略、以下の様に述べた。

「自分は前任地の中国でヴィシー政権と日本のために働いていたため、親独家だと思われる。だが自分は仏人であり、常に仏の利益のために活動している。これまでヴィシー政府のために働いたのもそれが理由だ。自分はペタン首席のシンパ（Pétaniste）でも、ドゴール將軍のシンパ（Gaulliste）でもない」（dodis.ch/50633, le 27 Juillet 1944）

公使の日誌から、この後任の大使が枢軸国と連合国のはざまで揺れている様子がよくわかる。公使によると当時、在日仏人の大部分は、日本に気を使っ

てか、少なくとも表向きはペタン支持を表明していた（dodis.ch/50633, le 8 Septembre 1944）。

日誌によると、戦局悪化で外務省は8月、在京の外交団に疎開を勧告し、スイス公使館は多くの機能を軽井沢に移した。これ以降、Gorgé公使は東京と軽井沢を車で往復することになるが（dodis.ch/50633, le 25 Août 1944）、その間の11月、公使は東京で空襲に遭遇し、概略、以下の様に日誌に書いた。

「空襲警報の後、爆撃音が聞こえ、暗闇の中を人々が怒号と共に走り、赤坂の公使館からは四谷方面の空が赤くなるのが見えた。こんな状況は続くだろう。爆弾は今後、我々の上に降りかかる可能性もある。運の問題だ」（dodis.ch/50633, le 27 Novembre 1944）

軽井沢の生活では、公使らは飢えに加え、冬の寒さにも苦しんだ。公使自ら薪を割る（dodis.ch/50633, le 28 Octobre 1944）一方で、空腹を「コーヒーと小さなグラスのブランデー1杯」でしのぐこともあった（dodis.ch/50633, le 16 Decembre 1944）。欧州戦線では12月16日、独軍がベルギー南方のアルデンヌで一時的な攻勢にでる「バルジの戦い」が起きたが、その攻勢も独軍の燃料不足から、25日までが限度だった（Parker 1997 : 213）。当時軽井沢におり、ラジオでこの状況を知ったとみられる公使は、クリスマスを「不安と共に」迎えた（dodis.ch/50633, le 25 Decembre 1944）が、独軍の失速に大晦日はほっと一息つき、「今晚はラジオで陽気な音楽を探そう」と日誌に記している（dodis.ch/50633, le 31 Decembre 1944）。

2.6 1945年

2.6.1 独降伏後の世界とスイス外交：ドゴールとの会話

独は西部戦線で1945年5月7日に、東部戦線で同9日に連合軍に降伏し、この後、枢軸側で戦うのは日本だけとなった（油井、古田 1998 : 115）。このためか、同年のスイス外交文書を見ると、戦後世界を見すえたものが散見される。

例えば、1945年4月から米・サンフランシスコで国連創設のための会議が始まり、6月には50カ国が国連憲章に調印した（油井、古田 1998 : 196-197, ブリ

タニカ 国際連合)が、この世界の動きにスイスは同年4月23日、各国の公使、領事館に書簡を送り、その中立性と国際連合に関する立場を説明した。会議にスイスは参加しなかったが、書簡ではまず、大戦下、スイスは連合国の利権保護を行う一方で、難民も数多く受け入れたと主張し、スイスの中立性は大战中も「全欧州にとって真の利益」(les vrais intérêts de l'Europe entière)だったと主張した。この上で書簡は、国際平和を目的とする国連の設立を熱望するが、国連では各国共同の軍事活動が予想されるため、その加盟についてはスイスの中立性から判断を当面、保留すると説明している(DDS, vol.15 : 1065-1067)。スイスが国連に加盟したのが戦後半世紀以上経った2002年だった(毎日新聞2002.9)ことを考えると、文書は当初からスイスが国連参加を一定程度でもあれ躊躇していたことを示すものとして興味深い。

スイス外交は当時も、世界で鍵を握る人物にも密着していた。例えばDDSの公電を見ると1945年7月17日、パリ駐在のBurckhardtスイス公使は仏のドゴール将軍に夕食に招かれ、その時、ドゴール将軍が独やヒトラー、そして日本について語った様子を本国に報告している(DDS, vol.16 : 60-65)。

公電によると夕食会はパリ・ブローニュの森のそばにある将軍の「美しい(jolie)」邸宅で催されたが、スイス公使らが到着すると、将軍は非常にくつろいだ様子で、まず公使らに当時の仏領チュニジアの長官から贈られた、金属性の鯉の巨大な置物を見せた(DDS, vol.16 : 60)。一方、夕食会後の庭でのお茶の際、将軍は大战中の対ソ戦での独の戦いぶりやドイツ民族、及びヒトラーについて、概要次の様にも述べた。

(41年は)冬の到来が早く、独は人的・物的に大きな被害を受けた。だが、翌春には攻戦に転じ、卓越した戦いぶりを見せた。ドイツ人は偉大な民族だ。そのリーダー(ヒトラー)に偉大さが欠けていたわけでもない。彼が心底、残忍だったとは信じていない。むしろ非人間的(plutôt inhumain)で、奇妙な蔑視観が強かった(DDS, vol.16 : 61)。

大战中、1941年6月に対ソ戦を開始した独は翌年8月には北コーカサスを占領している(油井、古田1998 : 91-93)。

また、将軍は日本については、概要、こう述べている。

日本を葬り去ろうとするのは大きな誤りで、それは人間性の観点からも悲しむべきことだ。日本は欧米の技術や手法に順応したが、その奥底には古くからの確固たる、そして価値のある文化がある。なにかずくその中には、妥協を許さぬ名誉心がある。

庭でのコーヒーのあと、再びサロンに戻ると、将軍は将来の欧州について概要、次の様にも語った。欧州を統べる（pour faire l'Europe）には、私の王党派のような、自分の枠に閉じこもった保守的な人間ではだめで、シャルルマーニュやナポレオンのような皇帝が必要だ（DDS, vol.16 : 61-62）。シャルルマーニュは8～9世紀にゲルマン民族を統合、西欧をほぼ統一し、800年に西ローマ帝国の皇帝となったカルル大帝（ブリタニカ カルル1世）のことだ。

「ぎごちなさ。気の短さ。非常に鋭敏な批判的精神。それも自らを守るための批判精神……。将軍の雰囲気には様々なものが混在し（互いに）競い合っていた」

Burckhardt スイス公使はそう公電でドゴール将軍を評していた（DDS, vol.16 : 63）。ドゴール将軍がその後、1958年12月の仏大統領選で圧勝して以来、1969年まで仏大統領を務めた（ブリタニカ ドゴール）のは周知の事実だ。公電はスイス外交がいかに世界の要人に食い込み、情報を収集していたかの一端を示している。

2.6.2 日本支配地域のスイス人の惨状

1945年4月27日のスイス連邦評議会（内閣）では、東京からのGorgé公使の報告を基に、日本とその占領地での日本軍によるスイス人虐殺や、スイス人への暴行、虐待が問題視されていた。DDSによると、フィリピンではスイス人12人が日本軍に「言語道断」なやり方で殺されており、その中には若い夫婦と生後数カ月の子どもが住む家が（日本軍に）放火され焼き殺された例や、スイス人父子が拘束され、手榴弾で殺された例があった。マニラの防空壕の中では、日本軍に殺されたとみられる数100人の遺体が見つかったが、その中には

3歳と9歳の子どもを含むスイス人6人の遺体もあった。フィリピンではこのほかにも2人のスイス人が行方不明となっているほか、マーシャル諸島では海岸でボートにのったスイス人神父を日本軍が射殺していた。

また蘭印のジャワ、スマトラ島ではスイス人18人が逮捕されたほか、日本国内でも横浜や神戸のスイス人の企業幹部がスパイ容疑で逮捕され、別なスイス人女性は、理由不明のまま8カ月拘束された。報告を行った当時のスイス政治省（Département politique）は、①日本へ強い抗議を行う②日本に対し国際慣例に則ったスイス人の保護を求める③日本側の対応が不十分な場合、制裁行為として連合国内での日本の利権保護活動を中止する……の3つを提案している。これに対し評議会では①、②を決議するとともに、③の制裁行為としては、独からスイスに避難中の日本外交官の国外追放も視野に入れるべきだとも決議した。スイス政府は同年5月、フィリピンでの問題について在ベルンの日本公使館に抗議したほか、同年6月には、日本に対しスイス人殺害で100万³の損害賠償を求めることを決めている（DDS, vol.15 : 1086-1089）。

筆者はこの内容の一部を紙面で報道したが、その際、スイス史が専門の北海道大学教授、田口晃は「今回の資料は日本国内では知られておらず、とりわけ中立国スイス国民を日本がどのように扱ったかが具体的に分かり興味深い」との談話を寄せている（毎日新聞 1997 a）。

2.6.3 本土空襲

東京では3月9日、4月13日、5月25日に大きな空襲が行われた。3月は浅草など下町中心に東京の4割が焼失し、4月は豊島、四谷など、5月は残る山手方面の大半が焼かれた（林 1997 : 404）が、Gorgé 公使はこの5月の空襲に遭遇し、1週間後、以下のような公電を送っている。「5月25日の空襲は非常に怖い（terifiant）ものだった。街の中心が全て焼失した。宮殿や外務省を含む官庁の建物の非常に多くが灰燼に帰した。英米大使館も被害を受け、トルコ（大使）の住居と事務局がひどく破壊された。英米トルコ（の被害）については別電で送る。スイス公使館も数多く爆撃され出火したが、私の所有物は無事だ。ス

イス人の死亡者はいないが、彼らはみな一部か、全ての財産を失った」(dodis.ch/51404)。

公使は東京で何度か空襲に遭遇しており、日誌では公電以上に生々しい空襲の状況が語られている。例えば、2月18日の日誌で公使は概要こう記す。

サイレンが一晩中続き、(灯火管制で)真っ暗な中、まず遠くで対空砲と思われる轟音が聞こえてくる。爆弾はすぐそばの麴町、赤坂に落とされたに違いない。霧雨の中、東への空が真っ赤に燃えている。少ししてから、さらに鮮明な光が空に瞬き、玄関の広間が赤く染まった。その光で新聞が読めるようだ。火事の音が聞こえる。惨禍の中、私はコートの襟を立て公使館の中を歩き回り、風が吹く玄関の広間で人間と神に見捨てられたようにしている。窓からは死と悲しみをたたえた空が見える。爆弾が落ちてきたら、誰が助けに来てくれるのか。確約はない。朝5時前、疲れ切り、半分凍りながらもベッドに横たわった。近隣で爆発音を聞いたが、悪運には見舞われなかった。一時間ほど経ってから、ラジオが攻撃終了のニュースを告げた。朝9時に外務省に行ったが、担当官はいつもより青ざめていた。勝利を確信していた日本への、敵の懲罰が始まった(dodis.ch/50633, le 18 Février 1945)。

この空襲に遭った翌日、Gorgé公使は秘書と共に東京の銀座を見ている。日誌によると、かつて「美しく陽気」だった街は黒い灰の寄せ集めとなり、世界的に有名な「Mikimoto (御木本)」真珠店は爆弾に跡形もなく消え、そこには金庫の残骸が残されていた。ただ「Maruzen (丸善)」書店は奇跡的に残り、営業もされており、そこで公使は自分が1932年にスイスで出版した国際法に関する著書を偶然、見つけた。本を謹呈した日本の関係者が売りに出したものの様だった。犠牲者の遺体も見た。そここの防空壕の中は水浸しで、その底には凍った泥がべとついていた(dodis.ch/50633, le 19 Février, 1945)。

一方、公使は3月6日の日誌で、空爆とその後の東京の街の状況について概要、こうも書いている。

首都は決して眠れない。空襲に次ぐ空襲、崩壊に次ぐ崩壊。どこを見ても全ては死だ。それはカフカの小説の雰囲気을 想起させる。夜、全ては燃え、炎の

中に崩れ去る。朝、爆撃機は飛び去り、全ては消火され、瓦礫はきちんと山積みになり、そこにはもはや女性や子どもが泣き叫び、負傷者が助けを求める24時間前の惨劇はない。人々は、この不吉な場所を惨劇が半年前に起きたかのように行き交っている。この死への「慣れ」は異常だ。その死は翌晩、自分に巡ってくるかもしれないのだ (dodis.ch/50633, le 6 Mars 1945)。

上述のように、公使は1944年、公使館のかんりの機能を東京から軽井沢に移していたが、空襲激化の中、6月8日に本国に電報を送り、米側に将来的に軽井沢の空襲を行わないよう求められないかと聞いている。公電によると、公使は「スイスが日本での米の利益代表であることを考えると、(軽井沢への空爆停止を) 場合によっては主張できるのではないかと提案する一方で、本国が政治的にこの提案を適当でないと考える場合は、この提案には拘泥しない、と述べた。公使は同時に、米はスイスが米の利益保護の仕事を行う場所や、非軍事地帯には空爆しないとすでに決めたかもしれないとも指摘している。公電の最後では当時、米の国務次官になっていた旧知のグルー前駐日米大使(ブリタニカ グルー)に触れ、「グルー氏も軽井沢をよく知っており、酷暑の際はそこで休暇をとっていた」と記している (dodis.ch/1978)。

2.6.4 続く収容所訪問の努力

空爆などで日本での戦禍が極端に悪化しても、連合国の利益代表としての公使らの仕事は間段なく続いていた。その代表的なものの一つは、上述のように捕虜や抑留者の収容所の訪問だ。一連の公電や日誌を見ると、日本の軍部が非協力だったため訪問はなかなか実現せず (例えばdodis.ch/50633, le 14 Février 1945)、Gorgé公使が懸命の努力をしていることが分かる。

1945年4月、小磯内閣は総辞職し、7日に鈴木貫太郎内閣が発足、その外相兼大東亜相には東郷茂徳が就任した (林 1997 : 435-441)。東郷の外相就任は東条内閣以来、2度目だったが、1度目の時同様、公使は就任後の東郷と数回会談を行っている。日誌によると、最初の会談は5月上旬とみられ、東郷は公使らが駐留する軽井沢に会談のために自ら赴き、自分が所有する「小さな邸」で

長い間、公使と話し合った。会談は明るいものではなかった。

公使は東郷に、日本側は収容所の訪問を拒否し続けており、「昨夏以来、自分は品川（Sinagawa）と大森（Omori）の収容所しか訪問できておらず、これでは滑稽なくらい不十分だ」と苦情を述べた。これに対し、東郷は黙ったままだったという。一方、この時、公使は当時横浜在住のスイス人が数回、尋問され、拷問を受けたことも抗議している。「スイス公使館に何度も昼食をとるために来ただけで、（このスイス人を）スパイ扱いするのか」との公使の言葉に、当初、東郷は「驚くふり」をし、疑う様子だった。だが公使が拷問の様子を伝えたと東郷は椅子に縛り付けられたような様子だった（dodis.ch/50633, le 7 Mai 1945）。6月19日の公電によると、公使の努力と外務省の尽力でこのスイス人は、釈放されている（dodis.ch/2011）。

1945年6月16日、公使は外務省側と①戦犯収容所の訪問について②軍事施設に近く、戦禍が及ぶ可能性のある日本国内の収容所について③連合国側の抑留者と、連合国側にいる日本人抑留者との交換について……などの「懸案の問題」を長い間話し合った。これを報告した6月19日付の上述とは別の公電によると、当時、外務省は公使の収容所訪問について軍部の了解を得ようと交渉していたが、公使はこの外務省と軍部との交渉は難航していると述べ、スイス本国には、英米側にこの状況を伝えるよう求めている（dodis.ch/1980）。また、収容所に戦禍が及ぶことを懸念する公使に対し、外務省側は防空壕の設置などで可能な限り空爆から収容者を守ると述べる一方、今や米の空爆は郊外も含め至る所になされており、収容所を移動させても、収容者の安全性が担保されるものではないと指摘していた（dodis.ch/1981）。

一方、同時期の別な公電によると、一端中止されていた公使の戦犯収容所訪問について、外務省は近く再開させる方針であると伝えてきたという。この時、外務省は、中止されていた理由は、収容所の編成替えて、多くの収容者を移動させていたからだと説明した。だが公使は、中止の真の理由は、空襲でダメージを受けた一部地域の訪問に軍が難色を示したせいではないか、と推測している（dodis.ch/1982）。これら地域に中立国の公使らが赴き、その状況を本国に

報告することを日本の軍部が警戒したのかもしれない。

これを受けて公使は7月5日の日誌で「外務省は我々に収容所の訪問を許可しつつある。私の努力は無駄ではなかった」と書いているが（dodis.ch/50633, le 5 Julliet 1945.）、その直前の6月22日には当時、埼玉県浦和市にあったとみられる抑留者の収容所への2度目の訪問が認められており、その時の詳細な報告書（全5頁）が残っている。

それによると、訪れたのはスイス公使館の館員と日本人随員の2人で、現場では3人の憲兵隊員が立ち合い、3時間の聞き取り調査が行われた。まず、当日午前9時に現場に到着した公使館員らは30分間、収容所の警備担当とみられる警官への聞き取りを行った後、2時間ほど収容者全員と集団で面会、さらに30分間、もう一度警官への聞き取りを行った。警官や収容者への聞き取り調査は、「驚くほど静かで簡単に」行われ、収容者たちが深刻な苦情を述べることはなかったが、これはそこに立ち合った憲兵隊員の存在が収容者たちを怖がらせていたためではないか、と報告書は推測している。

報告書によると、当時収容所は空襲の影響で電気が通じておらず、井戸水用とみられる電気ポンプが使えないため深刻な水不足で、1か月以上、風呂に入っていない者もいた。また食事も不足していたが、抑留者たちは日本社会での深刻な食料不足を知っており、苦情を述べても無意味だと述べた。6～7日間に一度支給されるパンは古く、腐りかけており、抑留者は焼いて食べる必要があったが、これも石炭や薪などの燃料不足でままならない状態だった。また、抑留者らは自ら野菜栽培を行っていたが、竹竿など、栽培に必要な道具の不足に悩んでおり、公使館員らは収容所側にこれらを供給するよう求めている。収容者らは石炭、薪などの燃料のほか、お茶、本や文房具、チャペルの使用時間の延長なども求めていた。一方、報告書によると赤十字国際委員会は6月、収容所にウールの衣服5人分、外套15人分を供給している（dodis.ch/2032）。

憲兵隊が立ち合ったため、十分な聞き取り調査は出来なかったかもしれないが、報告書からは、スイス側が戦禍の中、可能な限り詳細な状況を調べようとしたことが伺える。当時のスイスの日本での外交活動は、決して上辺だけのも

のではなかったといえるだろう。

興味深いのはこの時期、同様の活動を連合国・豪州で行っていたスイス外交団の報告だ（全19頁、文書は英文）。スイス外交文書によると、在メルボルンのスイス領事は6月20日、メルボルンから北西に約500^{キロメートル}離れたラブデー（Loveday）にあった日本人抑留者の収容所を訪問した。当時、この収容所には3施設に計1871人の日本人が収容されていたが、公電は各施設の日本人のリーダーや警備、娯楽、書記、翻訳、食料、教育などの担当者名を記載したうえで、収容所での食料や衣類、労働、医療・衛生、教育、郵便物・新聞の受け取り状況のほか、これまでの死者やその死因、埋葬状況も克明に報告している。それによると例えば、衣類の供給状況は満足すべきものだが、一部の収容者からは靴下の不足が指摘された。また売店は品物とその補充が豊富で、強制労働にも十分な賃金が支払われていた。地元のYMCA（キリスト教青年会）からは野球道具一式が贈られ、施設間同士の野球試合の実施が話し合われてもいた。

この公電ではまた、体調悪化を訴えるものは豪州軍の医務官がすぐ診断し、病院に収容すべきかを判断するほか、歯科の治療状況も、入れ歯の不足などを除けば、満足すべきものだと述べるなど、収容所の状況が微に入り報告されている。報告書は最後に「詳細な観察の結果、豪州当局と収容者の関係は良好だ」と述べている（dodis.ch/2033）が、スイス外交による交戦国の利権保護活動は、豪州でもまさしく綿密なものだった。

2.6.5 カミカゼと原爆

日本は1944年10月に海軍航空機による神風特別攻撃隊（特攻）を組織し、終戦まで約2400機が出撃、2520人が戦死した。また、このほか特攻では陸軍航空特別攻撃隊員、1388人が戦死している（ブリタニカ 神風特別攻撃隊）。公使はこの「カミカゼ」についても日誌で触れている。沖縄では、1945年4月1日に上陸した連合国軍18万3千人に対し、日本軍が特攻を中心とする反撃を繰り返していた（林 1997：370-371）。公使は5月8日の日誌でカミカゼを概要、次の様に強く批判する。

軍部にとって沖縄は（本土防衛の）究極の希望だった。どんな犠牲を払ってでも、敵に占領を諦めさせようと考えたのだ。そこで彼らはカミカゼのことは語らなくなった。爆装した戦闘機で米艦の艦橋に飛び込む若い英雄たちのことだ。彼らは特攻に志願したという。そうかもしれない。だが志願だろうがなかろうが、勇敢な彼らは着陸装置（*de train d'atterrissage*）を持たず、再び陸に戻れぬ航空機で死地に飛び込んでいくのだ。

軍部はカミカゼの実効性を固く信じている。敵を恐怖に陥らせようと、彼らは情報を流す。米軍が沖縄周辺で150隻の軍艦を展開するのなら、150機か200機のカミカゼで十分だ。それで沖縄と日本は救われる、と。200人の飛行士に自殺の用意があるし、必要なら1000人でも確保できる、と専門家たちは確約する。

ここで彼らの思考は停止する。仮に米軍が沖縄攻略を諦めても、米が本土への破壊的な空爆を中断するわけがない。カミカゼを続けることに説得力はない（*dodis.ch/50633, 1e 8 Mai 1945*）。

特攻で使われた兵器の一つにロケット機「桜花」がある。前部に1.2トンの爆弾を搭載した機で、それを爆撃機の下部に装着、敵艦近くで切り離す仕組みだったが、大きな戦禍をあげないまま、爆撃機の飛行士を含め約430人の若い命が奪われた²⁸。無論、その攻撃の性格上、桜花には着陸のための車輪はない。公使が記した「着陸装置のない航空機」とは、この桜花を指していたのかもしれない。

沖縄戦では航空機2571機が特攻を行ったほか、戦艦大和を含む連合艦隊も海上からの特攻を行ったが、結局、大和を含む多数の艦船が撃沈され、戦いは6月下旬に終焉した。日本軍戦死者は約11万人、市民の犠牲者は10万人だった（林 1997: 371-373）。公使が記したように、まさに日本側の「思考が停止した」戦いだった。

連合国は1945年7月26日、日本に軍国主義の一掃や本土以外の領土の放棄、民主化、戦犯処罰などを求めるポツダム宣言を発表したが、鈴木首相が28日、これを黙殺すると、その9日後の8月6日には広島に、そして9日には長崎に

原爆が投下された。この間の8日にはソ連が対日宣戦を布告した（油井、古田 1998 : 122）。周知のごとく、日本は最後まで、ソ連に和平の仲介を求めており、7月12日、天皇は近衛を特使としてソ連に派遣するよう命じ、翌13日、日本はこれをソ連側に提案した。だが、ソ連は2月の米英ソ首脳によるヤルタ会談で、米英側に、独の敗戦後、3か月以内に対日参戦することを確約しており、ソ連側は「近衛特使派遣」の提案に明確な回答を出さなかった。（林 1997 : 436, 450-452）。日本側は完全にソ連の動きを読み誤っていたのである。

Gorgé 公使は、広島での原爆投下やソ連の参戦について8月7日、8日の日誌で概要、以下の様を書く。

7日：広島が一発だけの、しかし全く新しい種類の爆弾で壊滅した。謎に包まれた爆弾で、通常の何千の爆弾より威力がある。人命の損失は著しいだろう。一秒のたった数分の1でドラマは終わった（dodis.ch/50633, le 7 Août 1945）。

8日：広島犠牲者は10万人に達する模様だ。このいわゆる原子の爆弾で新たな時代が到来した。東京が傲慢にも拒絶したポツダム宣言には「脅し」が隠されていた。敵が手に入れたぞっとする兵器を前に、今や（日本の）戦争指導者たちは何をしようというのか。希望は残されていない。ロシアが宣戦布告したばかりだからだ。彼らはぶんぶんうなるハエのようにやってきた。すでに連合国が勝っている時に、何のための武力介入なのか？

連合国が日本に48時間以内の降伏を勧告した、といううわさが走る。降伏しないと、「別な広島」（d'autres Hiroshima）の刑が宣告されるだろう。（dodis.ch/50633, le 8 Août 1945）。

続く長崎については、公使は9日の日誌で概要、次の様を書く。

別な悲運だ。二つ目の原爆で長崎が灰燼に帰した。鈴木（首相）、東郷（外相）は日本の崩壊を望んでいるのか。彼らが熟考する間にも、何千トンの爆弾が降り注ぎ、犠牲者が増え、工場が喪失し、工業地帯が燃える。本土沿岸で自由に動き回る米艦隊にも砲撃される。かつて世界の尊敬を集めた日本の連合艦隊にとって、何たる屈辱だろうか。敗戦を認めず、海軍は全部隊を失うつもりなのか。世界最強とされた艦隊が、悲劇的な結末を迎えることほど悲しいこ

とはない。悲しみが胸がつまる（J'en ai le couer gros）（dodis.ch/50633, le 9 Août 1945）。

当時の日本政府の指導力のなさを見抜き、「降伏しないと別の広島が宣告される」と、原爆投下が広島だけに終わらない可能性を読んでいた公使の眼はここでも、特記に値するものだった。

当時の日本の断末魔の状況を公使は、当然ながら本国に報告している。8月13日の公電で公使は、概要、次のような報告を本国に送った。

日本がポツダム宣言の受託を拒否して以降、物事の展開は急を告げている。新聞は報道しないものの、長崎、広島悲劇は急速に民衆に知れ渡りつつあるようだ。（本土での）長期戦に持ち込むという幻想も、ソ連参戦で潰えてしまい、日本政府はパニック状態だ。ソ連の姿勢を読み違えた東郷は意気消沈し、（一部政府が疎開する）軽井沢に戻った。国民は無条件降伏が連合国によって示されたことをまだ知らない。軽井沢では兵士が皇族用の防空壕を、何もなかったかのように掘っている。

外務省高官らは、事態の重大さに何も話さない。終戦が期待されるが、これまで連日、勝利間違いなし、の宣伝工作が続いていただけに、敗戦という悲惨な現実を知った場合、軍部や国民がどう行動するかわからない。長く続く日々の荒廃で精神的、物質的に困窮した国民は簡単に降伏するかもしれないが、皇軍不敗のドグマを信じ込む軍部は別の反応を示すだろう。絶望からの暴挙（actes désespoir）に走ることが懸念される（DDS, vol.16 : 78-79）。筆者はこの公電の一部を報道している（毎日新聞 1997 d）。

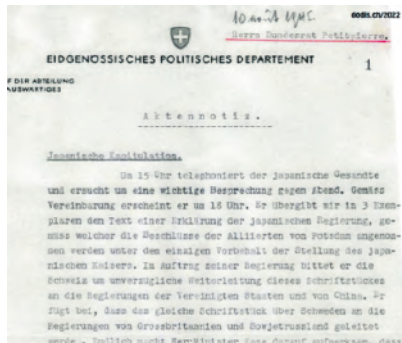
広島、長崎の原爆投下とソ連参戦で、土壇場に追いやられた日本は、結局、8月9日から10日にかけての天皇臨席の御前会議でポツダム宣言の受託を決めた。だがこの会議でも陸相の阿南惟幾は依然として本土決戦による戦争継続を強く訴えていたほか、これを受ける形で14日深夜には陸軍の若手将校の一部が、和平派の要人を隔離しようとクーデターを図り、近衛第一師団長を射殺したうえ、玉音放送の録音盤の奪取を図った（林 1997: 474-475）。周知のように、このクーデターは失敗に終わったが、これら一連の動きは、まさしく公使の予

測した「絶望からの暴挙」(actes désespoir) だった。

2.6.6 ポツダム宣言受託とスイス外交①：1945年8月10日～11日

上述の御前会議の後、日本は日本時間の8月10日、中立国スウェーデン、ス

イスを通じて、ポツダム宣言受託を連合国側に伝えた(林 1997: 468)。この間、スイスがどう動いたかは、スイス本国政治省のシュトウキ外交局長が残した独語のメモ(dodis.ch/2023、写真⑤)や、同局長と在ワシントンのスイス公使館との電文のやり取りに詳しく残されている。以下10日から15日までのこれらスイス外交文書を基に、日本の終戦でスイス外交が果たした役割を見てみよう。



写真⑤：日本のポツダム宣言受託に関するシュトウキ局長のメモの一つ

欧州大陸時間10日午後3時(日本時間同日午後10時)。駐ベルン日本公使館の加瀬俊一公使が、スイス連邦政治省のシュトウキ外交局長に「夕方、重要な会談を行いたい」と電話をかけてきた。午後6時にシュトウキ局長の事務室に現われた加瀬公使は、ポツダム宣言受託の日本政府の声明(コピーを含め3通)を局長に手渡した。声明によると、受託に当たり日本政府の唯一の留保事項は「天皇の地位」に関するものだった。加瀬公使はスイス側にこの声明を米国と中国に通達してほしい、と求め、英国とソ連に対してはスウェーデン経由で通達する、と述べた。

シュトウキ局長はすぐさまこれに応じ、さらに3通の声明文のコピーを求めた。加瀬公使が部屋を出た後、すぐに局長は在ワシントンのスイス公使館に暗号電報を送るとともに、同公使館に公開電報も送り、受領すべき(重要な)暗号電報が届く旨を伝えた。公開の電報は午後7時35分に発信されている。

当時、中国政府があった重慶にスイス代表団はいなかったため、局長は在ベ

ルンの中国代表に電話を入れたが、中国代表はスイス中部の都市、ルツェルンにいて、とのことだった。局長はすぐさまルツェルンに電話して中国代表と話し、中国代表は同僚をすぐさま局長の下に走らせた。局長はこの中国代表の同僚に日本の声明文を渡すとともに、必要な説明も行った。この一方で、シュトウキ局長は在ベルンの米国公使館にも連絡し、参考のためにこの声明文を渡した（dodis.ch/2022）。

シュトウキ局長が在ワシントンのスイス公使館に送った暗号電報では、当然のことながら在ベルン日本公使から手交された日本側の英文声明の全文を載せたうえで、これを米政府に伝えるよう訓令している（dodis.ch/2020 : 1-2）。日本側声明の原文、及び英文は国立国会図書館で、閲覧が可能だが²⁹、参考までにここでスイス側の暗号電報に載った日本側の英文声明の概要を記しておく。

「常に平和を希求する日本国天皇は、更なる戦争の継続による災禍から人類を救うため迅速なる敵対状況の停止を求めており、日本政府は数週間前、ソ連政府に対し敵対国との和平の仲介を求めていた。不幸なことに、この平和への努力は失敗し、日本政府は陛下の和平を求め、戦争の災禍を終わらせたいという神々しい意向に基づき、下記のように決定した」「日本政府は1945年7月25日のポツダム宣言について、この宣言が日本国天皇の支配者としての特権を侵害しないという理解において、受け入れる用意がある」「日本政府はこの理解が担保されるよう求め、早急にこれが明確にされることを切望する」（dodis.ch/2020 : 1）

翌11日、米国東部時間午前10時40分（欧州大陸時間午後4時40分）に米国のバーンズ国務長官は在ワシントンのスイス公使館と連絡を取り、連合国側の返答を日本側に渡すよう求めた。周知のように、この返答で連合国側は、天皇の地位について連合国軍最高司令官に「従属する」（subject to the supreme commander of allied powers）とし、将来の日本の政治形態は日本国民の自由意思にゆだねる、と述べていた。在ワシントンのスイス公使館からスイス本国に送られた暗号電報は、この米の返答を英語の原文で記載したうえで、「国務長官は『米政府は日本政府からの早急な返答を待っている』と付け加えた」と結

んでいた (dodis.ch/2021 : 1-2)。

この暗号電報はスイス本国に欧州大陸時間の11日午後8時50分(米東部時間午後2時50分)到着した。スイス電報局(国営ラジオスイス)がシュトウキ局長に電報の到来を告げると、局長はすぐに加瀬公使を召喚し、午後9時45分に公使に米の返答を正式に手交した。バーンズ國務長官が在ワシントンのスイス公使館に連絡してから、約5時間が経過していた。米の返答を手渡す際、局長は加瀬公使に、「今後、日本側の返答を受けるために私は昼夜を問わず(an jederzeit, Tag und Nacht)待機している」と告げてもある(dodis.ch/2023)。

2.6.7 ポツダム宣言受託とスイス外交②：1945年8月12日～15日

最終的な日本からの返答を14日に受け取るまでのシュトウキ局長の長い3日間は、そこから始まった。米側の返答に対し、日本国内では陸軍を中心に不満が高まり、12日、13日の閣議、最高戦争指導会議が紛糾を重ねたからである。問題は返答の中の、天皇が連合国軍最高司令官に「従属する」という表現と、日本国民の自由意思で将来的に政治形態を決めるという部分だった。阿南陸相らは、このままでは「国体護持」は不可能であり、少なくとも米側に真意を再確認すべきだ、と主張していた(林 1997 : 470-471)。

一方、シュトウキ局長は11日、加瀬公使に米側の返答を渡した後、ラジオスイスの社長と連絡を取り、「日本からベルンの日本公使館に返答の電報が到着次第、自分に知らせるように」と依頼していた。ラジオスイスの社長は翌12日午後10時30分、局長に電話し「東京から『13日午前6時以前に返答の電報が届くことはない』との報告を受けた」と述べ、13日午前7時45分にはやはり電話で「夜を徹して東京と連絡を取り続けたが、期待した電報はまだ届いていない」と報告している(dodis.ch/2023)。外交文書に残る局長のメモからは、じりじりしながら日本側の返答を待つ局長の様子をくみ取ることができる。

日本時間14日午前10時50分から約1時間、最後の御前会議が開かれ、敗戦を受け入れる天皇の最終決定が下された(林 1997 : 473-474)。在ベルン日本公使館の加瀬公使から、スイス側にポツダム宣言最終受け入れの声明が手渡され

たのは欧州大陸時間14日午後8時10分（日本時間15日午前3時10分）だった。声明では天皇が宣言受け入れの勅令（詔書）を出したこと、全軍に対し、降伏と武装解除を命じる用意があることなどを述べていた。スイス連邦政府は、その55分後の午後9時5分、この英文の声明を在ワシントンのスイス公使館に電報で送った（dodis.ch/34:1）。

シュトウキ局長の別なメモは、この間の詳細な日、米、スイスの動きを伝えている。

それによると、日本側のポツダム宣言最終受託の遅れを気にしたシュトウキ局長はまず、14日駐ワシントンのスイス公使館に対し、日本側から回答があった場合、時間節約のためにベルンからワシントンへは暗号電文ではなく、通常の公開電文で連絡していいか、米政府に確認を取るよう求めた。現地からの午前11時の電文では米側はこれを了承していたが、その後午後4時の別の電文では、米側の「公開電文での回答は日本の回答に無条件降伏が含まれている場合だけにしてほしい」との要望を知らせてきた。在ベルン米公使館のハリソン公使も本国から同じ連絡を受けており、その旨を局長にすぐ知らせて来た。

局長は例によってラジオスイスに連絡を取り、東京から在ベルン日本公使館に電報が届いたら、直ちに連絡するように要請していたが、午前11時5分、ラジオスイスから連絡があり、日本公使館宛の長文の暗号電報が東京から届いたことを知った。局長はワシントンからの報告で、米政府が「非常に苛立ち、しかし興奮して」日本の回答を待っていることを知っており、午前11時50分、駐ワシントンのグレスリ・スイス公使に電話し、日本からの暗号電文の到着を告げるとともに「おそらく期待された回答だが、確証はない」と伝えた。ハリソン公使にも同じ内容を電話で伝えた。

同日、午後2時30分までに日本公使館からは何の連絡もなく、局長は公使館に問い合わせを入れた。公使館側は日本からの様々な暗号電文の到着を認めたものの、「これらの電文は最終受託の回答ではない」との返事で、局長はその旨を直ちにワシントンに打電した。同日夕までに東京から駐ベルン日本公使館へは電報が何通か届いたが、いずれも宣言受託に関するものではなかった。こ

の間、地元のジャーナリストたちは興奮した様子で様々の憶測を報じていたが、局長はメディアに対し「午後5時15分までには、まだ宣言受託の回答がない」と告げた。

加瀬公使から局長に電話連絡が入ったのは午後6時50分で、この時、加瀬公使は「回答が今届き、解説が必要だ」「1時間以内に手渡したい」と伝え、その後、午後8時に公使は局長を訪ね、回答を手交した。この間、米のハリソン公使はシュトウキ局長の執務室に待機しており、局長はハリソン公使と共に文書を公開電文で送るのか、暗号化するのかを協議した。日本からの回答には「判然としない部分や不備」があり、結局、2人は暗号電文で送ることに決めた。局長は午後9時5分に駐ワシントンのスイス公使館に電文を発信、午後9時22分には米国に届いたことが確認された。

ハリソン公使が局長の執務室にいる間、バーンズ米国務長官から電話が入った。公使は長官に日本の回答内容を読み上げ、長官はそれを公開電報でワシントンに送るよう指示した。しかしハリソン公使が電文を発信するより前に、ワシントンのスイス公使館には本国からの暗号電文が到着しており、その内容はすでにスイス側から米政府に渡されていた。

8月15日午前2時25分、ワシントンのスイス公使館から（日本のポツダム宣言受託を認める米国決定に関する）公開電文がベルンに届いた。局長は午前3時30分、加瀬公使を事務所に呼び、この米の日本に対する決定文書を直接、手渡した。メディアに対しては（一連の事実を）14日午後9時と15日午前3時45分に公表している。

15日午前7時30分、ラジオスイスの社長から局長に電話があり、午前5時から午前7時半の間、加瀬公使から依頼された日本向けの電報を送信したが、当初、「大気の状態が非常に悪く」（die atmosphärischen Störungen unüberwindlich waren）、送信に苦労したとの連絡があった。日本の局が受診を確認したのは午前7時40分（日本時間午後2時40分）になってからだった（DDS, vol.16 : 81-83）。筆者はこの間の経緯のごく一部について記事で触れている（毎日新聞1997 d）。

2.6.8 玉音放送

日本時間15日正午、天皇によるいわゆる「玉音放送」が始まり、Gorgé公使はこれを軽井沢の執務室で日本人職員らと聞いた。同日の日誌で公使はこの時の状況を概要、次の様に書いている。

天皇の声は低く響き、はっきりせず、年老いて聞こえ、感情を隠すために間違いなく意図的に声を押し殺していた。天皇の言葉を翻訳してもらおうと、その内容は明らかに日本を弁護していた。日本は他国を侵害する意図はなく、日本の参戦は自国の主権を守るためと、東洋の安定を求めてのことだ。だが戦況は悪く傾いた。敵はぞっとするような残忍な新兵器に訴え、多くの市民の犠牲が出た。さらなる戦いの継続は非常に無駄である。

「脅威にさらされていた主権を守るためと、東洋の安定のために参戦した……」。この天皇の言葉を公使は「真実を無視している」(*entorse à la vérité*)と日誌で批判した。「誰も日本の主権など欲しがって(脅威にさらして)おらず、東洋の安定(秩序)を乱したのは日本の軍部の貪欲さ」なのだ、と。放送に公使館の日本人職員らはひどく動揺し、日本人運転手は自らのそれを隠そうと、公使館の車の中に引きこもってしまった(*dodis.ch/50633, le 15 Août 1945*)。長い戦争は、終わった。

2.6.9 廃墟

本稿冒頭で述べたように、Gorgé公使の日誌は508頁に上り、1945年秋までの日記390頁と、9月から12月までの日本での滞在、そして故国スイスに1月に到着するまでを描いた報告、約120頁で構成されている。ちなみに後者の報告は公使によって1頁から117頁まである程度、正確なページ番号がふられており、以下この部分の引用では公使の日誌に関するDodisの引用番号(*dodis.ch/50633*)とともに、このページ番号を記す。

この報告でまず興味深いのが、軽井沢で終戦を迎えた公使が、9月5日、終戦後初めてスイス国旗をつけた公用車(米製ビュイック)で東京に戻ってくる時の、日本国土の情景描写だ。公使はこの長い道のりを概要、次の様に記す。

軽井沢から群馬県高崎市（Takasaki）に到着すると、地域一帯が空爆で丸ごと大きく抉り取られた様だった。かつてよく通った高崎の街は火事でひどく醜くなり、全く別な国を旅している気がする。畑では人々が働いており、公使の車を長いこと見つめていた。公使は一瞬、身の危険を感じたが、彼らは公使に微笑みかけ、どこに向かっているのか知りたがった。公使の車の日本人運転手が説明すると、彼らは「はあ、そうですか」（Ha, so desuka!）と驚き、礼儀正しくお辞儀をした。掘り立て小屋にすむ生き残りの国民たちは公使の予想に反し、みな「穏やかで無頓着で」（*paisiblement, nonchalamment*）、そして「謎の微笑み」（*sourire énigmatique*）を浮かべていた。侵略の中では尊大、傲慢だった日本人が、その本来の性格を取り戻した、と公使は感じた。

埼玉県熊谷市付近では、復員中の日本兵を見た。一様に疲れていたが、外国人である公使に対し、好意的な雰囲気、ある士官は公使の車のスイス国旗を見て、敬礼を行った。その一方で大宮市付近では米軍砲兵隊の縦列に出会った。ジープに乗った大尉と少し話したが、先着の憲兵隊が道の所々に立てた白旗を目印に目的地に進んでいるところだった。

やっと東京に到着すると、そこは空爆で月世界を思わせる、荒涼とした醜悪な場所になっていて。慣れ親しんだ街だが、自分がどこにいるか全くわからない。1942年までスイス公使館があった麴町付近も「巨大な台風に掃き散らかされた」（*balayé par un typhon d'une puissance titanesque*）状況で、公使館があった場所をやっと探し出したが、そこも、地面はむき出しで何も残っていなかった。戦前、辺り一帯にあった、板垣に囲まれた素晴らしい庭園のある邸宅も、付近で石けり遊びをしていた子どもたちも、みんな消えてしまった。

1924年から1926年までの前回の滞日時代に住んでいた、麻布1丁目や六本木も風景が一変しており、かつてチャップリンやロイドの映画を見た谷町へと続く道も、やはり、どこがどこだか全くわからなかった。日本人運転手はこの光景に微笑みを浮かべていた。日本人のメンタリティを知る公使は、その微笑みは、彼が「おかしい」と思ったから浮かべているのではなく、「目の人間」、即ち公使への礼儀や配慮から浮かべているのだと感じた。公使によると運転手

は「心の底ではひどく傷ついていた」のだ。

廃墟の中、貧相な菊5～6本が入る、さびた缶がおかれていた。近くに日本語と英語で「ゴトウ花店」(Goto, Florist)と書かれた、墓場の十字架を思わせるような看板が立っている。すぐに、ピンときた。商品が豊富で、外交官が足しげく通ったあの有名な「ゴトウ」に違いなかった。公使はこう書く。

「ゴトウは戦争が終わるとすぐに、この荒廃した場所でさびた缶一つで商売を再開したのだ。全てを失い、このさびた缶しか残らずとも、ゴトウは勇気を失わなかった。この始まり、というか再開は、一つの象徴だ。死は去り、命が復活した。時を失わず、すぐさまに。ゴトウと握手を交わしたい」(dodisch/50633 : 4-18)。

現在、東京都港区六本木には創業明治25年の「株式会社ゴトウ花店」の本店があり³⁰、公使が見た「ゴトウ花店」は同社の可能性が高い。

2.6.10 重光葵との対話

8月15日に総辞職した鈴木内閣の後を受け、東久邇稔彦内閣が発足し、重光葵が外相に就任した。重光の外相就任は、東条、小磯内閣以来3度目だったが、その重光は9月にすぐ辞職する。終戦連絡中央事務局の設置を巡り、同事務局を首相直属の機関としたい東久邇と、外務省の管轄下に置きたい外務省との争いが起きたためである。重光の後任には吉田茂が就任した(神田 1994 : 46-47)が、占領軍が突然、山崎巖内相などの罷免を命じた、いわゆる「民主化指令」を出したため、東久邇内閣は1か月半で総辞職した。山崎内相は「民主化指令」の直前、外国通信社とのインタビューで、秘密警察は今も生きており、政治犯は治安維持法によって逮捕される、と述べていた。時代錯誤の発言である。その後、10月9日に幣原喜重郎内閣が成立し、外相にはやはり吉田が就任した(神田 1994 : 87-88)。重光、幣原、吉田はいずれも外交官出身である(ブリタニカ 重光葵、幣原喜重郎、吉田茂)。

周知のように重光は、9月2日、東京湾上の米戦艦・ミズーリ艦上の降伏文書調印式に日本側代表として出席、調印した人物であり(神田 1994 : 68)、

1954年から1956年までの鳩山一郎内閣でも外相を務めている（ブリタニカ重光葵）。また吉田が幣原の後を継いで首相となり、1946年5月22日、その第一次内閣を発足させた（神田 1994: 189）のは言うまでもない。

重光、幣原、吉田が終戦後の日本の立て直しでカギを握ったのは間違いない。そして、これら3人の政治家とGorgé公使は、終戦後に次々と会談している。

日誌によると、まず軽井沢から東京に戻った脚で公使がむかったのは、当時、東久邇内閣の外相だった重光のもとだった。場所は当時外務省が仮事務所を置いていた帝国ホテルの一室である。無論、公使が重光と出会ったのは、これが最初ではない。重光とは東条内閣時代から会う機会があり、1944年3月には重光邸で外交官ら30人が招かれた昼食会に参加した（dodis.ch/50633, le 17 Mars 1944）ほか、その後も大戦中に何度か会談している。だが、その主な内容は、捕虜などの収容所への訪問がなかなか認められないことに対する公使の苦情が多かった（例えばdodis.ch/50633, le 3 Mai 1944）。

しかし今回の帝国ホテルでの重光との会談は、戦後ということもあり、かなり虚心坦懐なものだったようだ。日誌で公使はその時の様子を概要、次の様に記す。

国会に赴く前の黒いモーニング姿の重光は、公使に英語でHow do you do, Excellency? Very glad to see you（今日は閣下。お会いできて光栄です）、とほほ笑みかけ、貧相な室内の調度品を示しながら、これが日本国の今の大臣の居場所なのだ、と部屋の狭さをわびた。公使がたった今、軽井沢から戻ってきたばかりだと述べると、重光は恐怖の入り混じった驚きの表情を浮かべた。この荒廃した国土を通りぬけてきたのか？というのだ。公使はフランクにこう答える。閣下、あなたの国民たちは、あなたが考えるより素晴らしい人々だ。東京への帰る道すがら、彼らは微笑んでくれ、徒歩で復員中の帝国陸軍の士官は、私の車のスイス国旗に敬礼さえてくれた。この戦争で悪かったのは、低い地位にいる人々（一般市民）ではなく、高い地位にいた人々（指導部）だった。

これに対し重光が、高い地位にいた全ての人が悪かったわけではない、と答えると、Gorgé公使は、確かに天皇は悪くはなかった、と応じた。天皇自身

がこの戦争を挑発したのではなく、周りが彼に日本を取り巻く状況が恐ろしいものであると信じさせ、彼は、戦争は不可避だと考えてしまった。彼は犯罪者というより、犠牲者であり、非難できない。この公使の言葉に、重光は軍国主義が日本から一掃されたことに満足していることを隠さず、天皇のおかげで、日本が戦争を終わらすことができた、と天皇を賞賛した。

公使はまた、大戦中、警察が公使の活動に様々な妨害を行ったことや、大戦中の捕虜・抑留者収容所の訪問の困難さにも単刀直入に触れた。特に後者について公使は、日本は大戦中、米英の捕虜だけでも3万人以上を抱えていたが、公使が訪問できたのはその半数以下の1万1000人だけだったと指摘した。その上で公使は、数百人の収容者が死亡したかもしれず、日露戦争の際、日本が獲得した人間性（人権擁護）に関する素晴らしい評判を日本は台無しにしまった、と指摘している（dodis.ch/50633 : 18-24）。

ここで公使が言う「日露戦争の際、日本が得た素晴らしい評判」とは、当時の日本がロシア人捕虜を国際法の求め以上に厚遇し、「国際法順守の模範国」と賞賛されたことを指していたと考えられる。日本は日露戦争当時、「戦地軍隊ニ於ケル負傷者ノ状態改善ニ関スル条約」（ジュネーブ条約）と、捕虜の待遇について定めた「陸戦ノ法規慣例ニ関スル条約」（ハーグ陸戦条約及び規則）を批准しており、これらに則った行動だった（喜多 2014 : 333-337）。

公使の厳しい言葉に重光は、当時強力だった警察に対し、何もできなかったと告白し、後悔の念を示した。また捕虜などの収容所訪問について重光は、公使を助けるために個人的にしばしば介入したが、目覚ましい結果はなかったとわびた。

辛い会話だった。大災害に遭遇したような雰囲気の中、重光の姿に、公使は胸が締め付けられる思いだった（dodis.ch/50633 : 18-24）。

2.6.11 幣原喜重郎との対話

幣原は公使が外務省の法律顧問として1924年から1926年までに日本に滞在した際、加藤高明、若槻禮次郎両内閣で外相を務めており³¹、いわば「昔の上

司」で、その縁から会談が実現したようだ。「外交使節の長が首相を訪問するのは慣例ではないが、私は幣原がかつて私の畏敬する上司だったという理由だけで面会を求めた。かつて私は幣原に最大の親愛なる敬意 (*la plus affectueuse estime*) を抱いていた」([dodis.ch/50633](#) : 61) という文章で始まる、幣原との会談の報告は、概要以下のとおりである。

幣原「男爵」は、当時政府が入る、「以前、博物館か学校だった建物」で Gorgé 公使を真心一杯に迎えてくれた。20 年近く会っていなかった元の「上司」は、顔の皺に年月が刻まれ、頭は銀髪に変わっていた。だが幣原は、「大日本帝国がまだ偉大だった日々」、即ち列強と対等に語り合った時代の外務大臣・幣原のままで、鋭敏な眼差しは変わらなかった ([dodis.ch/50633](#) : 61)。

幣原は外相時代の大正末期から昭和初期にかけ国際協調、経済外交優先、中国の内政不干渉を柱とする協調外交を推進する、いわゆる「幣原外交」を推進したが、対米協調を基本とするその外交は軍部から軟弱だと強い反発を受けた（ブリタニカ 幣原喜重郎）。Gorgé 公使の言う「列強と対等に語り合った」姿勢とは、当時の幣原の外相としての姿を指していたと思われる。

公使が外交辞令に則り、日本を襲った災厄への同情の念を表明しようとする、と、幣原はそれを遮って言った。確かに我々にとっては、ひどい不幸だった。だが酷く後悔しているわけではない。惨憺な戦争は来るべくしてきたもので、有害な軍人たちの「クラブ」を一掃するためには唯一の方策だった。確かに戦争は大きな被害を与えたが、同時に安堵ももたらした。侵略者・日本は抹殺されたのだ。我々はより善いことに向け、やり直さなければならない。不幸なことに私は老い、私の力が及ぶかどうかはわからないが、ベストを尽くすつもりだ ([dodis.ch/50633](#) : 62)。1872 年 8 月生まれの幣原は、当時、73 歳になっていた（ブリタニカ 幣原喜重郎）。

公使は、終戦前に「昔の上司」(*ancien chef*) に会いに来なかったことをわびた。だが、それには理由があった。いったん引退した政治家に公使が合えば「猜疑心が強く、悪意で一杯の警察」が彼に事情聴取をしかねない。大きな迷惑がかかると考えたのだ。

これに対し、幣原は「あなたはうまくやった」(Vous avez bien fait) と言い、こう述べた。あなたは私に挨拶に来るべきではなかった。私に会えば、私に加え、あなた自身にも迷惑がかかったかもしれない。以前の警察なら何をやり出すか分かったものではない。

幣原の言葉は、公使にかつての警察の恐怖を想起させた。公使はこう書く。当時、無実の何千もの人々が刑事の影におびえ、神経に変調をきたして死んでいったのだ (dodis.ch/50633 : 63)、と。幣原は進駐軍の政策に必ずしも満足していない様子だった (dodis.ch/50633 : 64)。進駐軍は1945年11月4日、日本と中立国との外交関係を停止するよう命じているが³²、幣原は、この結論には論議の余地がある、と述べた。

最後に、幣原は大戦中の公使の連合国の利権保護に関する外交活動について概要、こう語る。当時、公使は義務を果たすために必要とあれば我々の政府に「かみついた」が、公使はよくやったと思う。公使の態度は素晴らしく、日本側の「2人の高い地位の方」(deux hautes personnalités) も同じ意見だ。

公使にとってこの幣原の最後の言葉は謎めいたものだったが、公使は「慎みのない憶測は敢えてしない」と結んでいる (dodis.ch/50633 : 64)。幣原は天皇、皇后のことを指していたのかもしれないし、公使もそう推測したのかもしれない。

2.6.12 吉田茂との対話

吉田茂は1936年に広田弘毅内閣が発足する際、その「参謀」として組閣にかかわり、自らも外相候補として名が挙がっていたが、軍部の反対に遭い就任できなかった (林 1997 : 13-14)。また吉田は、1944年3月には東条内閣の倒閣を近衛らと画策した (林 1997 : 419) ほか、1945年4月の鈴木内閣成立の際は、和平派への圧力を強めようとする陸軍により逮捕されている (林 1997 : 441)。これらを見るだけでも、吉田が軍部、特に陸軍と対立してきたことが分かる。

その吉田とGorgé公使が会談したのは、公使が幣原に会ってからすぐだったようだ。場所は、新たに外相の執務室がおかれた「純和風の家」で、そこには

「コケに覆われた庭園」があり、「黒い小石の石畳」があった。公使によると会談は吉田が望んだもので、大戦中の公使の活動に対する日本政府の不十分な対応について、吉田は遺憾の意を表明したがっていた。公使は会談の様子を概要、以下の様に記す。

吉田は愛層がいい、ごま塩頭の小柄な男で、「すでに滅びてしまった言語を研究する教授」(professeur de langues mortes)のような顔立ちに、小さくいたずらな目が光っていた。吉田夫人がきゃあきゃあわめく5～6人の子どもたちにまつわりつかれながら部屋に入ってきた。家族連れの執務室である。吉田は刑務所を出たばかりだった。罪一つ犯していなかったが、体制側に共鳴しない彼を牢につなぐことが、時宜に適っていると体制は判断したのだ。それでも吉田は(刑務所で)苦しんだような痕跡は見せなかった。

吉田が語り始めた。今も自分は(戦犯として)米側に逮捕されるのではないかとの恐れを持っている。この朝も、この執務室に到着するまでに逮捕されるのではと感じたほどだ。明日はどうなるか分かったものではない。吉田はそう話すと微笑みを浮かべた。これに対し公使は、このような戦争の後では占領側は神経質になるが、日本が誠実に行動すれば落ち着くだろう、と応じている。

この後、吉田は戦時中に日本政府が公使らの外交活動などに与えた「艱難辛苦」(tribulations)に対し、長いことわびた。当時の当局の態度は、吉田の目から見てもばかげており、正当化できないものだった。なぜ人道的で崇高な公使らの仕事に対し、「ニッポン帝国」はこれほどの猜疑心を持ち、矮小な行為を行ったのか、と吉田は述べた。

その一方で、吉田は素直にこうも語った。しかしながら、艱難辛苦に出会ったのは我々も同じだ。我々も何らかの理屈をつけて、すぐに監禁される可能性があった。私は田舎の小さな自分の家を根城に、政治に参画し、軍の体制に抗うことができたかもしれないが、私はじっとし、隠遁生活を送っていた。しかし、私は時の政権のシンパではなく、それだけの理由で逮捕され、屈辱を受けた。

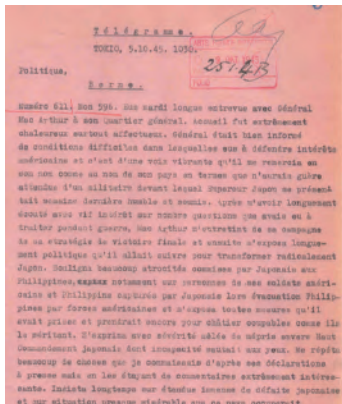
公使は、戦時中、日本政府が捕虜らに取った態度は、また「残忍」(cruel)

でもあったと主張したかったが、吉田を無用に苦しめるのはやめた。公使同様、吉田も不本意な状況を強いられたのであり、吉田の内面の苦悩は、そのストイックな微笑みの中からも伝わってきていた（dodis.ch/50633 : 64-68）。

吉田はその後、ワンマン宰相として、その剛腕ぶりが知られているが、この時期は進駐軍の逮捕に怯えていたことが公使の日誌から読み取れる。

2.6.13 長い任務の報酬：マッカーサーとの会談

連合国軍最高司令官であるダグラス・マッカーサーが戦後日本の政治、経済、社会に与えた影響が計り知れないことは、周知の事実だ。そのマッカーサーと



写真⑥：マッカーサーとの会談を報告する公使の公電

Gorgé 公使が一時間以上の長い会談を行ったのは、1945年10月2日のことだった。場所は皇居外堀に面する第一生命ビルに置かれた連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）である。公使はこの会談の内容を10月5日付の公電（DDS, vol.16 : 100）で本国に送っているが、その内容は概要以下の通りだ。

司令官は会談（entrevue）を誠意と愛情あふれる挨拶で始めた。大戦中、日本での米利益代表としてのスイスの活動が困難を極めたことをよく知っており、彼の名と、彼の国の名の下に、よく響く声で感謝の念を

表明した。先週、天皇が従順かつ畏まった様子でその前に立ち、自己紹介した軍人からは予想できないような言葉遣いだった。公使が大戦中に解決しなければならなかった様々の問題を話すと、司令官はそれを非常に興味深い様子で聞いたのち、これまでの彼の最終勝利に向けた軍事作戦や行動を語り、今後日本を根本的に変革するために考えている政策についても話した。

司令官はまた、日本軍がフィリピンで犯した多数の残虐行為に言及したが、その中には米軍が1942年にフィリピンを撤退する際、捕虜にとられた米兵や

フィリピン兵に対するものも含まれており、これら犯罪に対する今後の処罰についても説明した。司令官の態度はこれらの犯罪を見逃した日本軍司令部に対する軽蔑にあふれていた。彼は日本が負けたことの重大さを強調し、今後日本が国際管理下に置かれ惨めな状況になると繰り返した。最後に司令官は、日本を今後軍事的に無力化することを確約する、と言い放った。

その一方で、司令官はまだ日本の危険性は残っている、と付け加えた。日本が今後、安い労働力で廉価な製品を輸出し、アジアを牛耳るかもしれない、というのだ。司令官はこの危険について、労働組合を創設して労働者の給与と生活水準を引き上げ、それを製品価格に転嫁することで、廉価製品の輸出、即ち経済侵略を防ぐ、との考えだった。

去り際、司令官は公使を書斎に招き、彼の署名入り写真を公使に贈呈し、米国経由で帰国する場合の船の手配など、今後必要なことは何でも言ってほしいと述べた。出口までは別な将軍が見送ってくれたが、その将軍は天皇の処遇がまだ決まっていないことを隠さなかった（DDS, vol.16 : 100-101）。筆者はこの公電の一部を報道しているが、日本外交史が専門の早稲田大学教授、大畑篤四郎は筆者の記事に対し、「マッカーサーは冷戦が始まると日本の経済復興を推進したが、将来のアジアへの経済侵略を懸念していたという話はこれまで伝えられておらず、大変興味深い。当時のマッカーサーの対日観の新しい側面として注目される」との談話を寄せている（毎日新聞 1997 c,d）。またこのマッカーサーに関する報道は、記事発行直後にAFP通信によって転電され、世界に発信された（AFP通信 1997）。

前ページ写真⑥はマッカーサーとの会談を報告する Gorgé 公使の公電である（dodis.ch/24 : 1）。

この公電で、公使はマッカーサー司令官に、「大戦中、解決しなければならなかった様々の問題」を報告したと述べているが、その具体的な中身について公使は翌10月6日、再び公電を本国に送っている。内容は当然ながら、戦時中の公使らの連合国利権の保護活動、特に捕虜や抑留者の保護に関するもので、

そこでは公使らの活動が数値化されており、興味深い。公電の概要は以下の通りである。

会談中、司令官は公使が挙げた大戦中の連合国の利権保護に関する数字に非常に興味を示した。以下は、捕虜・抑留者の収容所に関する保護活動で公使が外務省側に書類申請した要望である。

- 1) (空爆などが行われる) 危険地帯からの収容所の移転 21件
- 2) 収容者の名前確認 58件
- 3) 収容所訪問 113件
- 4) 収容所への食糧調達 19件
- 5) (収容所のための) シベリア経由での薬品輸入 8件
- 6) (収容所のための) シベリア経由での食料輸入 27件
- 7) 不適切な取扱いに関する抗議 75件
- 8) 収容者への郵便の便宜 81件

書類での申請件数は全402件で、うち外務省から返答があったのは124件だった。大戦中の45か月間、公使は捕虜、抑留者の収容に関する問題だけで1000回以上は外務省などに足を運んでいるが、無論のこと、これには、捕虜・抑留者の交換や連合国の不動産の保護、など他の利権保護活動は含まれていない。

これらの申請の結果で得られた成果は以下の通りだった。

- a) 本国に存在を通達した捕虜、抑留者名 13万4000人。本国に通達できた死者数 2万4000人（これらの数字には通達の際の多数の重複が含まれている）
- b) スイス代表が訪問できた捕虜数 1万1200人
- c) 終戦後確認できた米英の捕虜数 約3万人
- d) 訪問した捕虜収容所数 36
- e) 終戦後、存在が確認された捕虜収容所数 102（従って、スイス側のためまぬ要求にも関わらず、訪問できなかった収容所は66に上り、捕虜の約3分の2を訪れることができなかった）

f) 訪問した抑留者収容所数 11

g) 一般市民の抑留者数 550

h) 訪問した米英一般市民の抑留者数 200 (DDS, vol.16 : 105-106)

これらの数字を見ると、Gorgé公使らが戦時中の困難の中、いかに多くの結果を出したか、そして公使の要望にも関わらず、日本側、特に軍部が多くの収容所や捕虜の存在を公にせず、いかに公使らの活動を妨げていたかが分かる。公電によると、司令官は、公使の要望に応じなかった日本側はそのつけを支払うことになる、と繰り返し述べた。また司令官は、公使の活動に対する軍部の妨害を看過した外務省も、その理由を示さなければならないと話し、日本側の甘言には騙されない、と確約した。

一方、公使が司令官に当時の重光外相について「彼は私（公使）を助けるためにできるだけのことをやったと何度も話していた」と告げると、司令官は懐疑的な表情を見せ、微笑みながら「彼を信じたのかね」と聞いている。これに対し、公使は、外務省側が実際にどの程度軍部と掛け合ったのかはわからない、と答えるだけだった (DDS, vol.16 : 106)。

いずれにせよ、連合軍の利益保護という、戦時下の日本でのとてつもなく難しく、かつ、心理的にも辛い公使の任務が、司令官の言葉で、幾分かでも報われたのは間違いない。公使は公電をこう結んでいる。

「我々の米国の利権保護活動は全く予期しない形で評価をされた。巨大な司令部でのマッカーサーの歓待は、忘れがたい思い出になった」(DDS, vol.16 : 106)

12月9日、故国に向けGorgé公使は日本を発った。帰国の最初の船は英国が手配した同国の戦艦だった (dodis.ch/50633 : 88-90)。

英国が大戦中の公使の利益保護活動を高く評価していたことの証だった。

3. 終わりに：再考—スイス外交文書の持つ意義

大戦期の日本を含めた世界の情勢について、スイス外交文書は情報の宝庫である。

その大きな理由の一つ目は、「永世中立国」としてのスイスの立ち位置だ。スイスは当時、枢軸国、連合国を問わず外交使節を派遣し、数々の情報を公電として本国に発信していた。これら公電は敵対する枢軸、連合国の双方の状況を、同時に、それともかなりの客観性と共に見ており、これらは本稿で紹介した Gorgé 公使や、ワシントンなどのスイス公使館の公電を見るだけでも明らかだ。ちなみにスイス・ローザンヌ大学教授、ハンス・ジョストによって、大戦中の公使の公電は米国側に傍受・解読されていたことが判明している。日本の状況を伝える公使の公電の客観性、情報性に着目したからこそその米側の傍受・解読だったと思われる。筆者はこの事実を調べたジョストとのインタビューを報道している（毎日新聞 1997 b）。

理由の二つ目としては、スイス外交団が発信した情報が、暗号であれ公開であれ、それはスイス国の公電であり、その情報は枝葉末節に至るまで、かなりの正確性が担保されているということだ。本稿でも述べたように、公使は東条の「自分はヒトラーのような独裁者ではない」との発言を公電で分析しているが、公使が送ったこの東条の発言の詳細は、当然のことながら、当時の記録に照らし合わせてみても正確である。

理由の三つ目は、これら公電には様々な歴史上の重要人物との会談・会見や、その分析が報告されていることだ。本稿では松岡、重光ら日本の各外相、近衛、東条、幣原、吉田ら日本の首相・将来の首相、さらにマッカーサーと公使との会談を報告する一方で、戦後、パリにおけるスイス外交団とドゴール將軍との会談にも言及した。このほか大戦期やその前後に限っても、スイス外交団は英首相だったチャーチルの話を聞いている（例えば dodis.ch/1204）し、公電で報告されたムッソリーニとの会見（例えば dodis.ch/45572）やヒトラーの分析も多い。筆者の経験では、ジャーナリストとしてその時代の重要人物に会うことは、様々な手続きが必要で時間がかかる。だが、スイス外交団は外交使節ということもあり、様々な重要人物に会えた。

理由の四つ目は、永世中立国としてのスイスの外交文書が、大戦を分析する上でこれまであまり顧みられておらず、それは取りも直さず、ニュース性が高

い可能性があるということだ。例えば、日本のポツダム文書受託に関しては、これまで、当事国である日本、米国の視点や文書に基づく分析が目立つが、本稿でも示したように、これをスイス側からの視点で見ると、また別の事実が判明し、それ自身がニュース性を持つことになる。

そして、スイス外交文書が情報の宝庫である最後の理由は、それが細部にわたって生き生きと当時の状況を伝えていることだ。

マッカーサーに関する公使の日誌に目を転じてみると、さらに細かい当時の情景が浮かび上がってくる。例えば連合国の中でも英国は進駐後、高官がすぐ公使の下を訪ね、自国に対する大戦中の公使の利益保護活動に礼を述べている(dodis.ch/50633 : 34)が、マッカーサーやその取り巻きの米軍幹部はそれをなかなか行わず、公使が憤慨していることが分かる(dodis.ch/50633 : 32-33)。マッカーサーは日本に進駐後すぐの1945年9月8日、米大使公邸に居を構えた(ペレット 2016 : 937-939)が、国際法上、この公邸の管理は当時まだスイスにあり、公使の許可がない限り使用は許されないはずで、公使は日誌に「このような傍若無人さ(sans-gene)にどう抗議すればいいのか」と書いている(dodis.ch/50633 : 32)。他方、上述の会見では、Gorgé公使はマッカーサーに非常に好い印象を持ったようで、日誌では概要、以下の様にマッカーサーを描いている。

「私の目の前にいるのは何という大人物だろう。まさに『男』という形容詞がしっくりしている。鋭い視線、限りなく親和力のある言葉や表情。男性的な表現力……将来新たなプルタークの英雄伝が書かれるなら、マッカーサーはその本に登場するだろう」「(会見を終え)私はひどく幸福だった。天皇をその下に赴かせた(fait venir l'Empereur du Japon chez lui)最初の間人であるこの勝利者に強い印象を持った」(dodis.ch/50633 : 53)

この他、日誌には公使がお茶に招かれたマッカーサー夫人の様子(dodis.ch/50633 : 56-59)のほか、GHQのウィロビー将軍や、英国軍の幹部などの様子(例えばdodis.ch/50633 : 47, 34-35)も描かれている。ちなみにウィロビーはGHQでマッカーサーの腹心であり、情報担当だったが、1950年に開始された朝鮮戦争では、マッカーサーに媚びへつらうあまり、マッカーサーの気に入る

ような情報しか提供せず、米側の戦局判断を大きく狂わせた人物だった、との指摘もある（Halberstam 2015 : 373-377）。

これらの詳細や、本稿で描ききれなかった大戦期の世界でのスイス外交団の動きについては、また別稿に譲りたい。

参考文献

▼ Document Diplomatiques Suisses（DDS, スイス外交文書：紙媒体）。

= 各巻の通し番号（vol.）順。

Jean-Claude Favez et al. (ed.), Documents Diplomatiques Suisses (DDS), vol. 10, Bern 1982.

Jean-François Bergier et al. (ed.), Documents Diplomatiques Suisses, vol. 13, Bern 1991.

Antoine Fleury et al. (ed.), Documents Diplomatiques Suisses, vol.14, Bern 1997.

Philippe Marguerat, Louis-Edouard Roulet (ed.), Documents Diplomatiques Suisses, vol.15, Bern 1992.

Antoine Fleury et al. (ed.), Documents Diplomatiques Suisses, vol. 16, Zürich/Locarno/Genève 1997.

Antoine Fleury et al. (ed.), Documents Diplomatiques Suisses (DDS), vol. 17, Zürich/Locarno/Genève 1999.

Antoine Fleury et al. (ed.), Documents Diplomatiques Suisses (DDS), vol. 18, Zürich/Locarno/Genève 2001.

▼ Document Diplomatiques Suisses（dodis, スイス外交文書：ネット媒体）

= 文書の引用番号順（dodis 文書には正式な表題がなく、dodis 側は引用形式としてこの引用番号の記載を求めている）。

dodis.ch/34, <<https://dodis.ch/34>>（Le 20 Septembre 2024）.

dodis.ch/1204, <<https://dodis.ch/1204>>（Le 20 Septembre 2024）.

dodis.ch/1281, <<https://dodis.ch/1281>>（Le 16 Août 2024）.

dodis.ch/1978, <<https://dodis.ch/1978>>（Le 15 Août 2024）.

dodis.ch/1980, <<https://dodis.ch/1980>>（Le 19 Septembre 2024）.

dodis.ch/1981, <<https://dodis.ch/1981>>（Le 20 Septembre 2024）.

dodis.ch/1982, <<https://dodis.ch/1982>>（Le 25 Septembre 2024）.

dodis.ch/2011, <<https://dodis.ch/2011>>（Le 20 Septembre 2024）.

dodis.ch/2015, <<https://dodis.ch/2015>>（Le 18 Août 2024）.

dodis.ch/2020, <<https://dodis.ch/2020>>（Le 15 Août 2024）.

dodis.ch/2021, <<https://dodis.ch/2021>>（Le 20 Septembre 2024）.

dodis.ch/2022, <<https://dodis.ch/2022>>（Le 28 Septembre 2024）.

dodis.ch/2023, <<https://dodis.ch/2023>>（Le 21 Septembre 2024）.

dodis.ch/2032, <<https://dodis.ch/2032>> (Le 20 Septembre 2024).
dodis.ch/2033, <<https://dodis.ch/2033>> (Le 5 Septembre 2024).
dodis.ch/50633, <<https://dodis.ch/50633>> (Le 21 Septembre 2024).
dodis.ch/51388, <<https://dodis.ch/51388>> (Le 28 Septembre 2024).
dodis.ch/51389, <<https://dodis.ch/51389>> (Le 20 Septembre 2024).
dodis.ch/51390, <<https://dodis.ch/51390>> (Le 20 Août 2024).
dodis.ch/51391, <<https://dodis.ch/51391>> (Le 15 Août 2024).
dodis.ch/51393, <<https://dodis.ch/51393>> (Le 20 Septembre 2024).
dodis.ch/51394, <<https://dodis.ch/51394>> (Le 28 Septembre 2024).
dodis.ch/51397, <<https://dodis.ch/51397>> (Le 20 Septembre 2024).
dodis.ch/51398, <<https://dodis.ch/51398>> (Le 20 Septembre 2024).
dodis.ch/51399, <<https://dodis.ch/51399>> (Le 15 Août 2024).
dodis.ch/51400, <<https://dodis.ch/51400>> (Le 31 Août 2024).
dodis.ch/51401, <<https://dodis.ch/51401>> (Le 31 Août 2024).
dodis.ch/51402, <<https://dodis.ch/51402>> (Le 15 Août 2024).
dodis.ch/51404, <<https://dodis.ch/51404>> (Le 20 Septembre 2024).
dodis.ch/51411, <<https://dodis.ch/51411>> (Le 28 Septembre 2024).
dodis.ch/52267, <<https://dodis.ch/52267>> (Le 20 Septembre 2024).

▼新聞記事／通信社記事

= 発行日順

「日本軍、スイス人にも残虐行為 第二次大戦中、占領地で一公文書から判明」、毎日新聞東京夕刊、1997.8.14、p.1 (1997 a)。

「第二次大戦中の在東京スイス公使館の極秘電、米国が傍受・解読——日本の窮状克明に」、毎日新聞東京朝刊、1997.8.14、p.7 (1997 b)。

「日本を軍事無力化しても、アジアに経済侵略の危険——進駐直後、マッカーサー司令官」、毎日新聞東京朝刊、1997.10.15、p.1 (1997 c)。

「公開されたスイス外交文書の内容」、毎日新聞東京朝刊、1997.10.15、p.3 (1997 d)。

MacArthur predicted Japan's economic invasion of Asia: report, Japan-war 10-15 0150, AFP, / AA1234/150805 GMT Oct, 1997.

「『戦時の日本』克明に 外交文書公開——スイス公使、本国に報告」、毎日新聞東京朝刊、1998.8.12、p.3 (1998 a)。

「在東京スイス公使電報要旨」、毎日新聞東京朝刊、1998.8.12、p.7 (1998 b)。

「スイスとナチスは共犯——経緯調べたダニエル・ブルジョワ氏に聞く」、毎日新聞東京朝刊、2000.8.08、p.6。

「スイスの加盟を承認——国連総会」、毎日新聞東京夕刊、2002.9.11、p.4。

「少年が見た本土初爆撃 開戦から4カ月『ドゥーリトル空襲』」、東京新聞朝刊、2021.4.18、p.23。

第二次世界大戦期のスイス外交 ～永世中立国の外交文書が示す戦時下の日本

▼文献

＝著者名のアルファベット／50音順

HALBERSTAM (2015), David, *The Coldest Winter, America and the Korean War*, Hachette Books, New York.

LUCK, James, Murray (1985), *A History of Switzerland, The First 100.000 Years: Before the Beginnings to the Days of the Present*, The Society for the Promotion of Science and Scholarship, Inc. California.

PARKER, Alastair (1997), *The Second World War: A Short History*, Oxford University Press, Oxford, UK.

アーネスト・サトウ、坂田精一訳（2010）、「一外交官の見た明治維新」、岩波文庫、岩波書店。

上山春平、三宅正樹（1990）、「世界の歴史 23 第二次世界大戦」、河出書房新社。

神田文人（1990）、「昭和の歴史⑧ 占領と民主主義」、小学館。

坂田卓雄（1998）、「スイス発緊急暗号電、笠信太郎と男たちの終戦工作」、西日本新聞社。

ジェフリー・ペレット、林義勝ら訳（2016）、「老兵は死なずーダグラス・マッカーサーの生涯ー」、鳥影社。

武田徹ら監修（2014）、「現代ジャーナリズム事典」、三省堂。

東条英機（1943）、「必勝の大道：東条総理大臣議会演説答弁集」、同盟通信社出版部。

林茂（1997）、「日本の歴史 25 太平洋戦争」、中央公論社。

ハンス・ケルゼン、長尾龍一訳（1976）、「社会主義と国家ーマルクス主義政治理論の研究ー」、木鐸社。

ハンス・ケルゼン、西島芳二訳（1977）、「デモクラシーの本質と価値」、岩波文庫、岩波書店。

福原直樹（2004）、「黒いスイス」、新潮新書、新潮社。

藤原彰（1994）、「昭和の歴史⑤ 日中全面戦争」、小学館。

矢田俊隆、田口晃（1995）、「世界現代史 25 オーストリア スイス現代史」、山川出版社。

郵船 OB 氷川丸研究会編（2008）、「氷川丸とその時代」、海文堂出版。

油井大郎、古田元夫（1998）、「世界の歴史 28 第二次世界大戦から米ソ対立へ」、中央公論社。

▼論文

＝著者名の 50 音順

岡本寛（2015）、「憲法制定権力論の系譜ー黒田覚と戦後憲法理論」、『島大法学』58（4）、島根大学法文学部、pp.111 - 128、<<https://ir.lib.shimane-u.ac.jp/31969>>（2024 年 10 月 27 日）。

喜多義人（2014）、「日露戦争と人道主義ー松山俘虜収容所におけるロシア傷病者救護の検討ー」、『日本法学』第八十巻第二号、日本大学法学会、pp.333-337、<https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_80_2/each/15.pdf>（2024 年 10 月 28 日）。

▼ネット

＝HP 運営主体のアルファベット／50音順

- Bibliothèque nationale de France (BNF) , Charles Arsène-Henry, < https://data.bnf.fr/11545392/charles_arsene-henry > (Le 20 Septembre 2024) .
- Dodis, Citations des volumes DDS et de la base de données Dodis, < <https://www.dodis.ch/fr/citation-des-documents> > (Le 15 Août 2024) .
- Dodis, Édition des documents, < <https://www.dodis.ch/fr/edition-des-documents> > (Le 27 Octobre 2024) .
- Dodis, Informations sur la personne, dodis.ch/P64, Gorgé, Camille, < https://dodis.ch/P64?p=0&dad=0&dau=0&dm=0&o=0&ds=0&dc=0#anc_o > (Le 15 Août 2024)
- Dodis, Partenaires, < <https://www.dodis.ch/fr/portrait/partenaires> > (Le 15 Août 2024).
- Diplomatische Dokumente der Schweiz (Dodis), Mitteilungen, Dodis: 25 Jahre online!, < <https://www.dodis.ch/de/dodis-25-jahre-online> > (15. August 2024)
- NHK アーカイブス、戦争、「第一次桜花特攻」、< https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0001100664_00000 > (2024 年 9 月 10 日)。
- 外務省、外交史料館、「日本外交文書」占領期全 3 巻の概要、二外交権の停止、< https://www.mofa.go.jp/mofaj/ms/da/page25_000803.html > (2024 年 9 月 10 日)。
- 外務省、歴代外務大臣一覧、< <https://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/gaisho/reference.html> > (2024 年 9 月 8 日)。
- 葛飾区、葛飾区史、第 2 次世界大戦下の生活：葛飾区内の戦災、< <https://www.city.katsushika.lg.jp/history/history/3-2-3-174.html> > (2024 年 10 月 27 日)。
- 株式会社ゴトウ花店、< <https://gotohanaten.com/pages/about-company> > (2024 年 9 月 10 日)。
- 国立公文書館、国立公文書館デジタルアーカイブ、小磯内閣総理大臣訓示演説集、「謹みて大詔に応へ奉る」、< https://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/listPhoto?LANG=default&BID=F0000000000000102624&ID=&NO=1&TYPE=JPEG&DL_TYPE=pdf > (2024 年 9 月 10 日)。
- 国立公文書館、国立公文書館デジタルアーカイブ、戦時行政職権特例・御署名原本・昭和十八年・勅令第一三三号、< https://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/Detail_F000000000000041328 > (2024 年 9 月 11 日)。
- 国立公文書館、国立公文書館デジタルアーカイブ、部落会町内会等ニ関スル訓令通知綴、< <https://www.digital.archives.go.jp/file/2327498.html> > (2024 年 9 月 11 日)。
- 国立国会図書館、ポツダム宣言受託に関し、瑞西、瑞典を介し連合国側に申し入れ関係、< <https://www.ndl.go.jp/constitution/shiryo/01/010/010tx.html#tc005> > (2024 年 10 月 20 日)。
- 首相官邸、東条内閣、閣僚名簿、< <https://www.kantei.go.jp/jp/rekidainaikaku/040.html> > (2024 年 9 月 10 日)。
- 首相官邸、内閣制度創設と明治憲法下の内閣制度、< <https://www.kantei.go.jp/jp/rekidai/1-1.html> > (2024 年 9 月 10 日)。
- 首相官邸、歴代内閣、第 24 代、加藤（高）内閣、< <https://www.kantei.go.jp/jp/rekidainaikaku/024.html> > (2024 年 9 月 10 日)。
- 首相官邸、歴代内閣、第 25 代、若槻内閣、< <https://www.kantei.go.jp/jp/rekidainaikaku/025.html> > (2024 年 9 月 10 日)。

首相官邸、歴代内閣、第40代、東条内閣、< <https://www.kantei.go.jp/jp/rekidai/kakuryo/40.html> > (2024年9月10日)。

首相官邸、歴代内閣、第41代、小磯内閣、< <https://www.kantei.go.jp/jp/rekidainaikaku/041.html> > (2024年9月10日)。

読売新聞オンライン、「わたしが見た戦争 戦争投稿 公債購入も戦後は紙くずに」、< <https://www.yomiuri.co.jp/serial/webkiryu/wararchive/20240808-SYT8T5667573/> > (2024年9月11日)。

▼その他（電子事典）

=項目の50音順

ブリタニカ国際大百科事典、小項目電子辞書版、「神風特別攻撃隊」、ブリタニカ・ジャパン、2013。

同上、「カルル1世 (Karl I, der Grosse; Charlemagne)」、ブリタニカ・ジャパン、2013。

同上、「グルー (Grew, Joseph Clark)」、ブリタニカ・ジャパン、2013。

同上、「国際連合」、ブリタニカ・ジャパン、2013。

同上、「重光葵」、ブリタニカ・ジャパン、2013。

同上、「幣原喜重郎」、ブリタニカ・ジャパン、2013。

同上、「ゾルゲ (Sorge, Richard)」、ブリタニカ・ジャパン、2013。

同上、「大東亜省」、ブリタニカ・ジャパン、2013。

同上、「東郷茂徳」、ブリタニカ・ジャパン、2013。

同上、「ドゴール (Gaulle, Charles André Joseph Marie de)」、ブリタニカ・ジャパン、2013。

同上、「松岡洋右」、ブリタニカ・ジャパン、2013。

同上、「吉田茂」、ブリタニカ・ジャパン、2013。

(Endnotes)

- 1 1982年毎日新聞社入社、静岡支局、東京本社社会部（事件・事故担当）を経て1995～2001年、同社ジュネーブ支局長。その後、2011年まで同社ブリュッセル、パリ支局長を務め、2012～2019年、筑波大学教授（研究対象はジャーナリズム論、スイス史、国連、欧州連合、欧州政治など）。2020年から青山学院大学地球社会共生学部教授（同）。
- 2 永世中立国としてのスイスはナポレオン後の欧州体制の再構築が話しあわれたパリ会議で1815年、仏・英・墺・露・プロイセン・ポルトガルの六カ国によって認められた。それ以降、スイスは永世中立を国是としている。矢田俊隆、田口晃（1995）、「世界現代史25 オーストリア スイス現代史」、山川出版社、p.268。
- 3 ニュース性（ニュースヴァリュー）の定義やその構成要素についてはジャーナリズム

- ム論上、様々な見解があるが、ここでは「マスメディアがどの出来事を報ずるかの判断基準」と定義する。武田徹ら監修、「現代ジャーナリズム事典」(2014)、三省堂、p.232。本稿ではこの「マスメディア」は日本の一般紙を念頭に置く。
- 4 スイスの公用語は1996年まで独、仏、伊の3語であり、大戦期前後の外交文書の多くは独語、仏語で書かれている。本稿では基本的な原文表記を筆者が滞在したスイス・ジュネーブ州で使われる仏語とするが、資料によっては英・独語も用いる。
 - 5 Dodis, *Édition des documents*, <<https://www.dodis.ch/fr/edition-des-documents>> (Le 27 Octobre 2024) .
 - 6 ブルジョワ氏へのインタビューは以下に詳しい。福原直樹、『黒いスイス』(2004)、新潮新書、新潮社、pp.38-51、及び、「スイスとナチスは共犯ー経緯調べたダニエル・ブルジョワ氏に聞く」、毎日新聞東京朝刊、2000.8.8、p.6。
 - 7 Dodis. Informations sur la personne dodis.ch/P64, Gorgé, Camille, <https://dodis.ch/P64?p=0&dad=0&dau=0&dm=0&o=0&ds=0&dc=0#anc_o> (Le 15 Août 2024).
 - 8 Diplomatische Dokumente der Schweiz (Dodis), Mitteilungen, Dodis: 25 Jahre online!, <<https://www.dodis.ch/de/dodis-25-jahre-online>> (15. August 2024).
 - 9 Dodis の仏語ホームページは <<https://www.dodis.ch/fr>> (Le 15 Août 2024)。
 - 10 Dodis, Partenaires, <<https://www.dodis.ch/fr/portrait/partenaires>> (Le 15 Août 2024).
 - 11 Dodis, Citations des volumes DDS et de la base de données Dodis, <<https://www.dodis.ch/fr/citation-des-documents>> (Le 15 Août 2024).
 - 12 Dodis, Informations sur la personne, loc. cit.
 - 13 Ibid.
 - 14 日誌の全訳は、2023年に大阪大学出版会から出版されている。カミュー・ゴルジェら著、クロード・ハウザーら訳(2023)、「駐日スイス公使が見た第二次世界大戦カミュー・ゴルジェの日記」、大阪大学出版会。
 - 15 葛飾区、葛飾区史、第2次世界大戦下の生活：葛飾区内の戦災、<<https://www.city.katsushika.lg.jp/history/history/3-2-3-174.html>> (2024年10月27日)。
 - 16 首相官邸、東条内閣、閣僚名簿、<<https://www.kantei.go.jp/jp/rekidainaikaku/040.html>> (2024年9月10日)。
 - 17 外務省、歴代外務大臣一覧、<<https://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/gaisho/reference.html>> (2024年9月8日)。
 - 18 首相官邸、歴代内閣、第40代、東条内閣、<<https://www.kantei.go.jp/jp/rekidai/kakuryo/40.html>> (2024年9月10日)。
 - 19 国立公文書館、国立公文書館デジタルアーカイブ、戦時行政職権特例・御署名原本・昭和十八年・勅令第一三三号、<https://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/Detail_F0000000000000041328> (2024年9月11日)。
 - 20 首相官邸、内閣制度創設と明治憲法下の内閣制度、<<https://www.kantei.go.jp/jp/rekidai/1-1.html>> (2024年9月10日)。
 - 21 Gorgé公使はこの教授をM.Kuroda, professeur de droit à l'Université de Kyoto (京都大学法学教授、クロダ氏)と記述しているが、このKurodaはその理論から、独の法学

- 者、ハンス・ケルゼンに一部、影響を受けた当時の京都帝国大学教授、黒田覚の可能性が高い。黒田については、以下を参照した。岡本寛（2015）、「憲法制定権力論の系譜－黒田覚と戦後理論」、『島大法学』58（4）、島根大学法文学部、pp.111－128、<<https://ir.lib.shimane-u.ac.jp/31969>>（2024年10月27日）。また、ケルゼンの思想については、以下を参照した。ハンス・ケルゼン、西島芳二訳（1977）、「デモクラシーの本質と価値」、岩波文庫、岩波書店、及び、ハンス・ケルゼン、長尾龍一訳（1976）、「社会主義と国家－マルクス主義政治理論の一研究」、木鐸社。
- 22 国立公文書館、op. cit., 部落会町内会等ニ関スル訓令通知綴、<<https://www.digital.archives.go.jp/file/2327498.html>>（2024年9月11日）。
- 23 例えば「わたしが見た戦争 戦争投稿 公債購入も戦後は紙くずに」、読売新聞オンライン、<<https://www.yomiuri.co.jp/serial/webkiryu/wararchive/20240808-SYT8T5667573/>>（2024年9月11日）。
- 24 同文書によると、回答書にはスイスとの経済交渉担当などを務めた英のDingle Macintosh Footと、在ロンドン米大使館で戦時経済部局の責任者だったWinfield W. Riefler宛だったことを示す手書きメモが残されている（DDS, vol.15：316, 1167, 1279-80）。
- 25 首相官邸、op. cit., 第41代、小磯内閣、<<https://www.kantei.go.jp/jp/rekidainaikaku/041.html>>（2024年9月10日）。
- 26 国立公文書館、op. cit., 小磯内閣総理大臣訓示演説集、「謹みて大詔に応へ奉る」、<https://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/listPhoto?LANG=default&ID=F0000000000000102624&ID=&NO=1&TYPE=JPEG&DL_TYPE=pdf>（2024年9月10日）。
- 27 Bibliothèque nationale de France (BNF), *Charles Arsène-Henry*, <https://data.bnf.fr/11545392/charles_arsene-henry>（Le 20 Septembre 2024）。
- 28 NHKアーカイブス、戦争、「第一次桜花特攻」、<https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0001100664_000000>（2024年9月10日）。
- 29 国立国会図書館、「ボツダム宣言受託に関し、瑞西、瑞典を介し連合国側に申し入れ関係」、<https://www.ndl.go.jp/constitution/shiryu/01/010/010tx.html#tc005>（2024年10月20日）。
- 30 株式会社ゴトウ花店、<<https://gotohanaten.com/pages/about-company>>（2024年9月10日）。
- 31 首相官邸、op. cit., 第24代、加藤（高）内閣、<<https://www.kantei.go.jp/jp/rekidainaikaku/024.html>>（2024年9月10日）、及び、Ibid., 第25代、若槻内閣、<<https://www.kantei.go.jp/jp/rekidainaikaku/025.html>>（2024年10月10日）。
- 32 外務省、外交史料館、『日本外交文書』占領期全3巻の概要、二外交権の停止、<https://www.mofa.go.jp/mofaj/ms/da/page25_000803.html>（2024年9月10日）。

（原稿受理日：2024年11月5日；掲載決定日：2024年12月12日）